

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77集

# 勇 前 遺 跡

県道宮ノ上川北線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.9

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



勇 前 遺 跡

県道宮ノ上川北線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.9

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 序

安芸市は県東部域の経済と文化の中心的な役割を担ってきました。さらに、今年度は悲願であった『ごめん・なはり線』が開通し、高知市とも鉄道で結ばれ、ますます人的交流が活発なものとなり、当地域の活性化に繋がるものと期待されています。

今回、報告します勇前遺跡は弥生時代後期の集落跡です。県東部ではこれまで行われた発掘件数は数少なく、今回の勇前遺跡の調査例は弥生時代の集落構造を明らかにする上で貴重な成果となりました。この成果をもとに安芸市を中心とする県東部の考古学的な歴史の解明を進め、地域の文化的発展を知ることができます。さらに、この報告書により一人でも多くの方が埋蔵文化財に対して興味・関心を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては地元内原野地区をはじめ、高知県安芸土木事務所の埋蔵文化財保護に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査報告書作成においても関係各位の皆様に多大な御指導並びに御教示を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

平成14年9月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 島内 靖



# 例　　言

1. 本書は、県道宮ノ上川北線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 勇前遺跡は、高知県安芸市内原野に所在する。
3. 調査は、高知県安芸土木事務所の委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間

試掘調査 平成13年10月10日～平成13年10月12日

発掘調査 平成14年2月5日～平成14年2月22日

報告書作成 平成14年5月7日～平成14年9月30日

5. 調査面積

試掘調査 100m<sup>2</sup>

発掘調査 599m<sup>2</sup>

6. 調査体制

## (1) 調査担当

総括 重森 勝彦 [(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査課長]

試掘調査 坂本 裕一 [高知県教育委員会文化財課 社会教育主事]

発掘調査 森田 尚宏 [(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 第二班長]

[現 高知県教育委員会文化財課 埋蔵文化財班長]

整理作業 久家 隆芳 [(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査員]

## (2) 総務担当

平成13年度

島内 信雄 [(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターナ次長兼総務課長]

山本三津子 [ 同 主任 ]

中城 英人 [ 同 主幹 ]

平成14年度

久川 清利 [(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターナ次長兼総務課長]

中城 英人 [ 同 主幹 ]

7. 本書の執筆は森田と久家が分担し、遺物写真撮影・編集は久家が行った。

8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたり、梅木謙一氏 [(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター]、藏本晋司氏 [(財)香川県埋蔵文化財調査センター]、門田由紀氏 [安芸市歴史民俗資料館]、山本哲也氏・出原恵三氏・吉成承三氏・坂本憲昭氏・宮地啓介氏・坂本憲彦氏をはじめ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸学兄に御指導・御教示を賜った。記して感謝する次第である。

## 9. 発掘・整理作業員

発掘・整理作業は以下の作業員により行われた。記して感謝の意を表したい。

### (1) 発掘作業員

影山博之 上屋福美 小松 貢 坂井千寿 菅井初恵 西村亜希 西村さよ子 畠山 緑

### (2) 整理作業員

山中美代子 黒岩佳子

この他、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター整理作業員さんのご協力を得た。

## 10. 出土遺物については「01 - 23 A Y」と注記し、図面・写真等の資料とともに高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

# 目 次

序 .....	.....
例 言 .....	•
目 次 .....	~

## 本 文 目 次

### 第 章 調査に至る経過と調査の方法

1 . 調査に至る経過 (森田) .....	1
2 . 調査の方法 (森田) .....	1
3 . 試掘確認調査 (久家) .....	2

### 第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1 . 地理的環境 (森田) .....	5
2 . 歴史的環境 (森田) .....	5

### 第 章 調査成果

1 . 調査の概要と基本層序 (森田) .....	7
2 . 検出遺構と出土遺物 (森田・久家) .....	8

### 第 章 まとめ

1 . 土器について (久家) .....	21
2 . 打製石鏃について (久家) .....	23

## 挿 図 目 次

Fig. 1 安芸市位置図 .....	1
Fig. 2 調査区位置図 .....	1
Fig. 3 試掘確認調査トレーニング位置図 .....	2
Fig. 4 試掘確認調査柱状図 .....	3
Fig. 5 遺跡周辺の地形 .....	4
Fig. 6 周辺の遺跡地図 .....	6
Fig. 7 検出遺構配置図・グリッド図 .....	7
Fig. 8 ST 1 遺物出土状況図 .....	8
Fig. 9 ST 1 平面図・断面図 .....	9
Fig. 10 ST 1 出土遺物実測図 .....	10
Fig. 11 ST 2 平面図・断面図 .....	11
Fig. 12 ST 2 出土遺物実測図 .....	12
Fig. 13 ST 3 遺物出土ドットマップ .....	13
Fig. 14 ST 3 平面図・断面図 .....	14
Fig. 15 ST 3 出土遺物実測図〔1〕 .....	16
Fig. 16 ST 3 出土遺物実測図〔2〕 .....	17
Fig. 17 ST 4 平面図・エレベーション図 .....	18
Fig. 18 ST 4 出土遺物実測図 .....	19
Fig. 19 掘立柱建物跡平面図・エレベーション図 .....	20
Fig. 20 試掘調査出土遺物実測図 .....	20
Fig. 21 有茎式・無茎式比率分布図 .....	23

## 表 目 次

Tab. 1 ST 1 ピット法量表 .....	10
Tab. 2 ST 2 ピット法量表 .....	11
Tab. 3 ST 3 ピット法量表 .....	14
Tab. 4 ST 4 ピット法量表 .....	18
Tab. 5 器種組成比率 .....	21
Tab. 6 出土土器観察表 1 .....	26
Tab. 7 出土土器観察表 2 .....	27
Tab. 8 出土土器観察表 3 .....	28
Tab. 9 出土石器・ガラス小玉観察表 .....	28

# 写真図版目次

- PL. 1 調査区遠景
- 調査区近景
- PL. 2 ST 1 検出状況
- ST 1 完掘状況
- PL. 3 ST 1 遺物出土状況
- PL. 4 ST 2 検出状況
- ST 2 完掘状況
- PL. 5 ST 3 検出状況
- ST 3 完掘状況
- PL. 6 ST 3 遺物出土状況
- PL. 7 ST 4 完掘状況
- 完掘状況全景
- PL. 8 出土遺物
- PL. 9 出土遺物
- PL.10 出土遺物
- PL.11 出土遺物
- PL.12 出土遺物



# 第 章 調査に至る経過と調査の方法

## 1 . 調査に至る経過

勇前遺跡は安芸市内原野に所在する広範囲に及ぶ遺跡であり、分布調査では弥生土器、土師器、須恵器等が採集され、古代を中心に弥生、古墳時代を含む複合遺跡と考えられる。発掘調査は県道宮ノ上川北線の拡幅整備事業に伴い行われており、平成13年10月に実施された試掘確認調査の結果を受けて、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターにより平成14年2月に本調査が行われた。

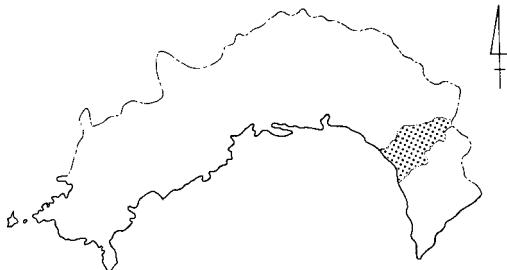


Fig. 1 安芸市位置図

## 2 . 調査の方法

今回の発掘調査に関しては、事前に試掘調査を行い遺跡の範囲、深さ等を確認した上で工事により影響を受ける範囲を本調査の対象とした。試掘調査の結果については、すでに試掘調査報告書により報告されているが、試掘坑TP 2・TP 3及びTR 1において竪穴住居跡とピットが検出され、調

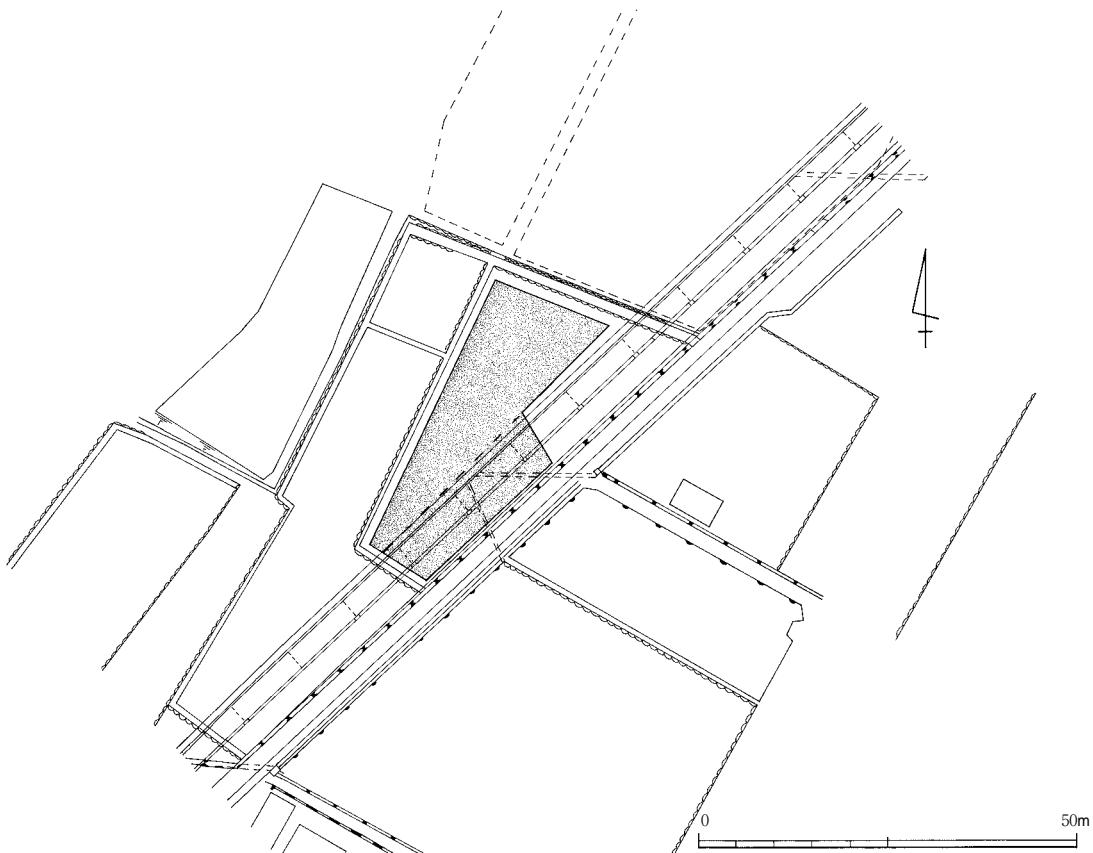


Fig. 2 調査区位置図

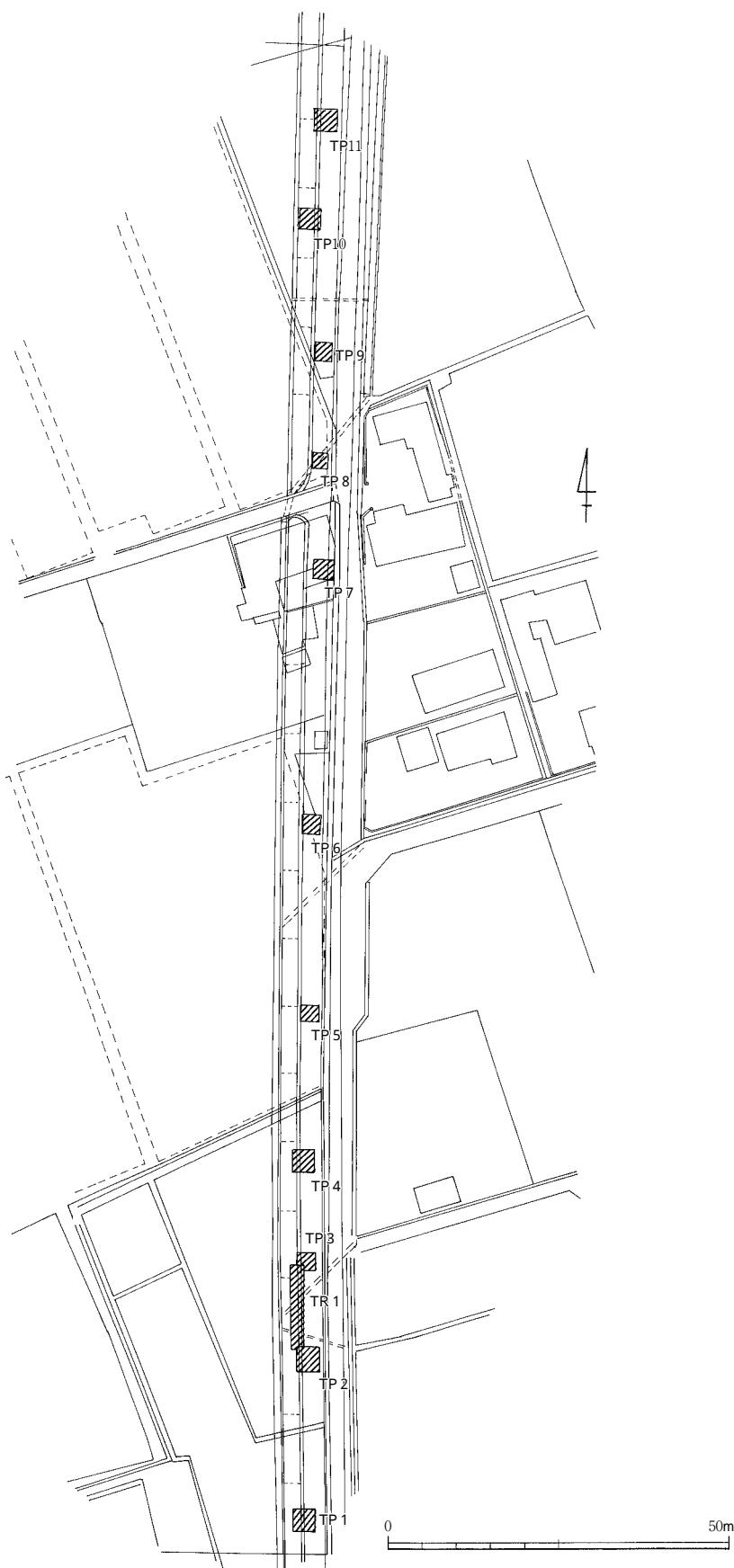


Fig. 3 試掘確認調査トレンチ位置図

査が必要とされた。

本調査は試掘調査により遺構が検出された範囲を対象として平成14年2月に実施された。調査は表土掘削後、遺構の検出から開始され、最終的には竪穴住居跡4棟とピット群を確認した。調査にあたっては調査区の状況に応じた任意のグリッドを設定し、南北ラインをアルファベット、東西ラインをアラビア数字で表し、グリッド名称とした。測量に関するてもこのグリッドにより行い、最終的には公共座標第系に取り付け、遺構図面を作成した。なお、道路西側の表土掘削範囲内にも竪穴住居跡が検出されたため、調査区を拡張し確認を行った。

### 3. 試掘確認調査

調査対象地内に任意の試掘坑を11箇所設定した。重機により表土を除去した後、人力を併用し遺構・遺物の検出に努めた。その結果、TP2・TR1において削平は受けたものの竪穴住居跡の一部とピットを検出した。TP2・TR1以外

については削平を激しく受けていると考えられ、遺構・遺物は皆無であった。また、表土直下の砂岩礫を含むシルト層は地点により層厚及び標高が異なっている。耕作地化する際に削平された部分と埋め立てられた部分の差を反映しているものと考えられ、旧地形を復元することができる。

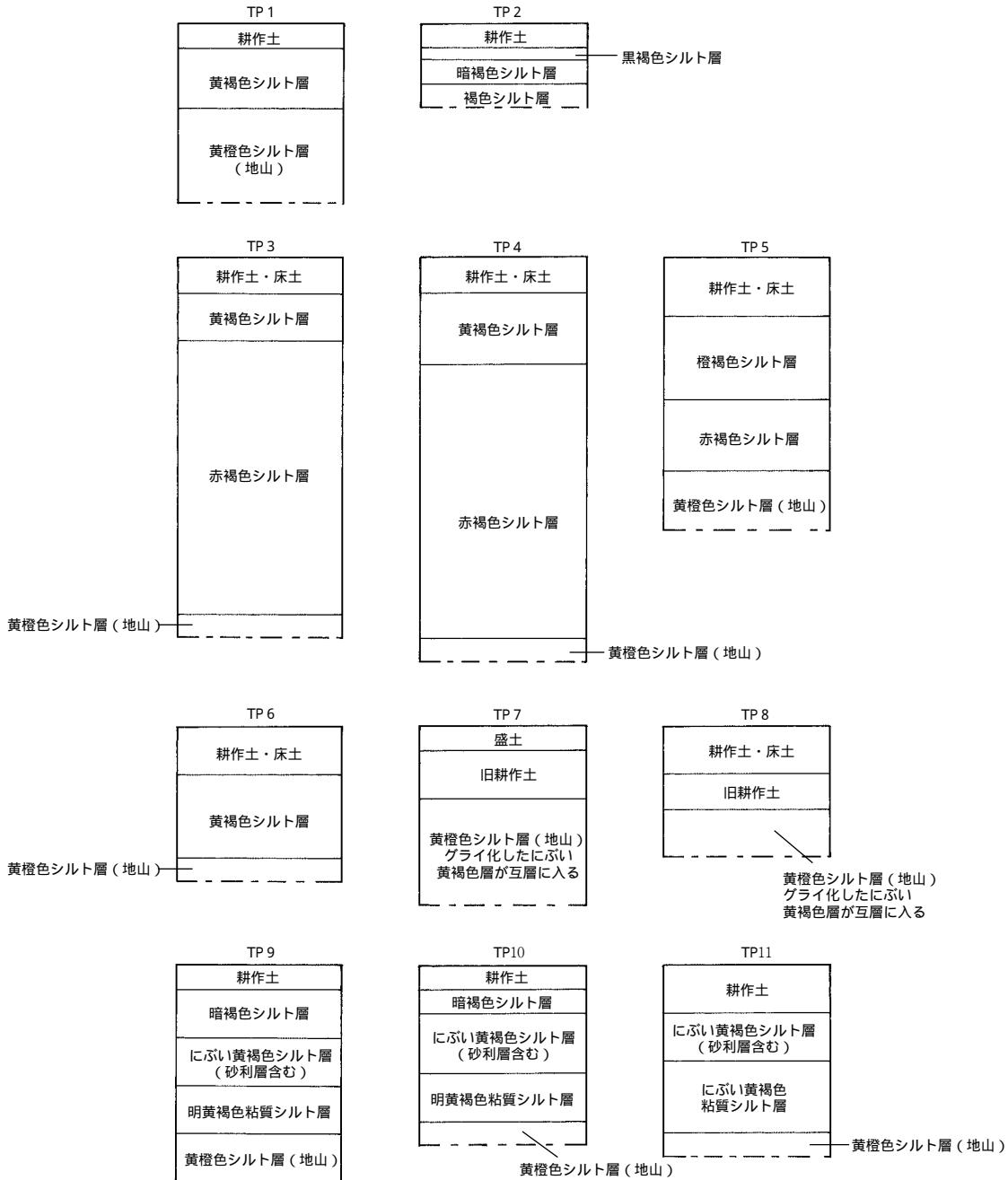


Fig. 4 試掘確認調査柱状図

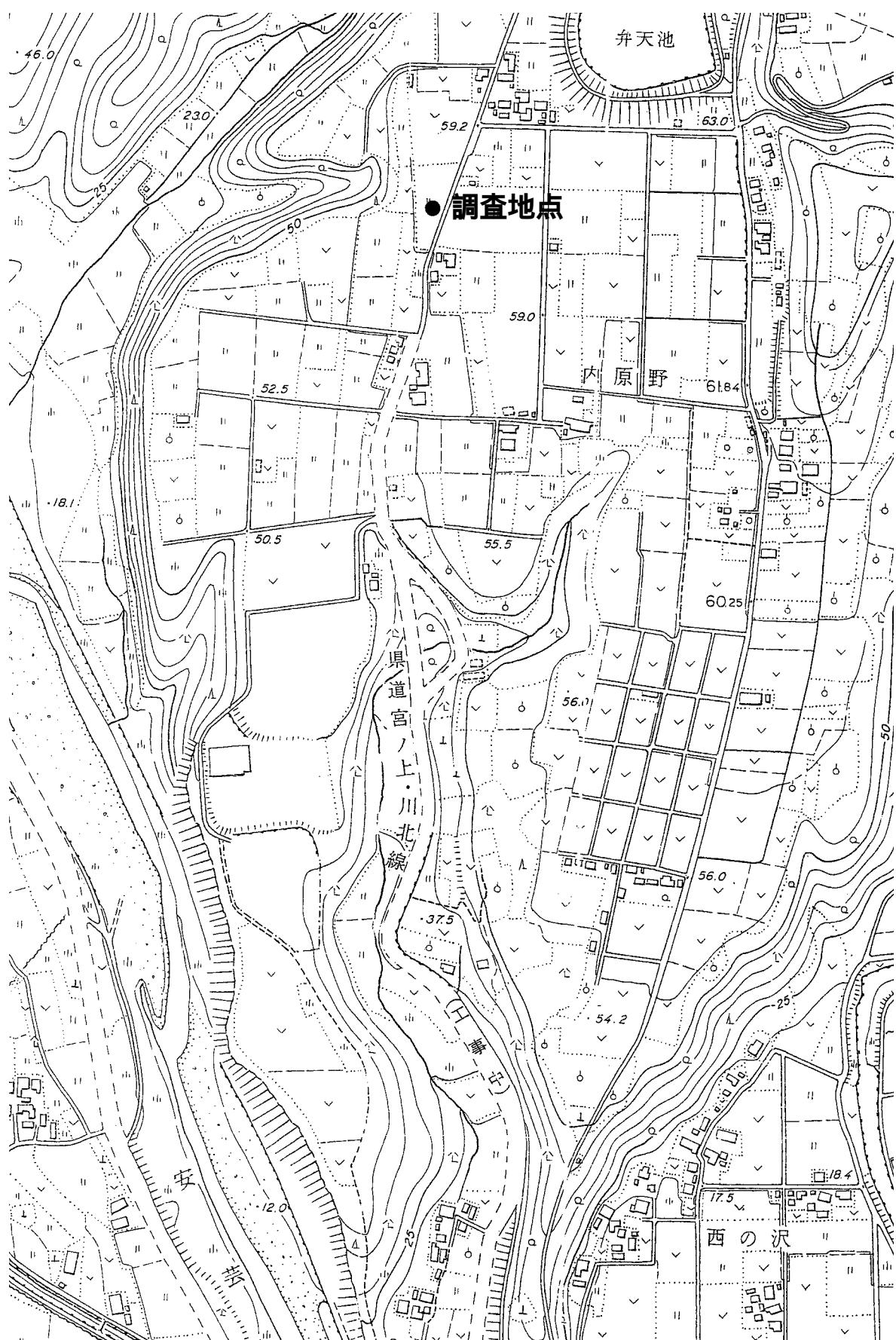


Fig. 5 遺跡周辺の地形

# 第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

## 1. 地理的環境

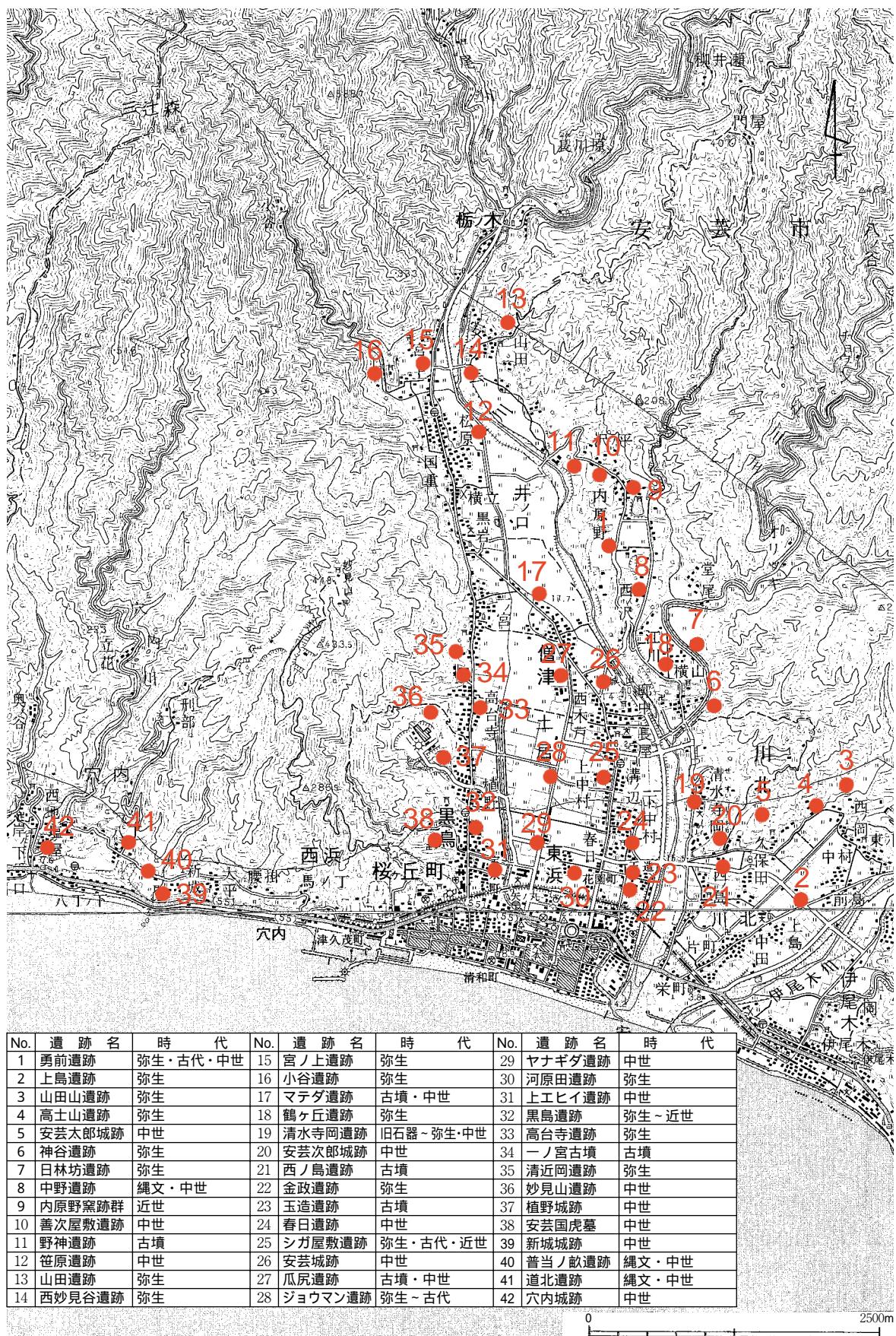
遺跡の立地は安芸川の左岸、河岸段丘上であり、平坦な段丘面が広がっている。段丘面と安芸川の河川水面の比高差は約40mであり、小河川により部分的に段丘面が削り込まれている。勇前遺跡の北東側には小河川を堰き止めて造られた弁天池が存在しており、遺跡周辺では河岸段丘上とはいえ、小河川による水利は十分にあったものと考えられる。また、これまでの安芸市の遺跡の分布状況や発掘調査の成果からみると、安芸川の沖積平野である低地部分は、現在、水田やビニールハウスとして安芸地域の農業の基礎をなしているが、遺跡の存在は少なく、やはり安芸川の氾濫等により、過去においては生活の基盤となりうる場所ではなかったと考えられ、河岸段丘上の開拓によって生活領域が拡大、成立したものと推定される。

## 2. 歴史的環境

安芸地域における旧石器時代の遺跡は現在のところ確実なものは確認されておらず、縄文時代から遺跡の存在が知られているが、遺跡数も少なく詳細については今後の調査課題である。

弥生時代になると遺跡数も増加し、安芸川の両岸に発達する河岸段丘上に遺跡の分布がみられる。今までに調査された遺跡としては、勇前遺跡と同じく安芸川の左岸河岸段丘に立地する清水寺岡遺跡があげられる。調査では6棟の竪穴住居跡と3基の土坑、溝、ピット等が検出されている。時期的には弥生時代中期後半から後期前半と考えられ、中でも中期後半が中心になるものとみられる。特徴的なのは竪穴住居跡から石鏸とともにサヌカイトのチップが多量に出土したことであり、香川県産のサヌカイトを石材とした石鏸作製が行われていたことが判明している。弥生時代後期の遺跡では、安芸川右岸段丘上の清近岡遺跡の発掘調査が行われている。清近岡遺跡では後期後半の竪穴住居跡が検出されており、集落の拡散と展開の一端を見ることができる。また、特記すべき遺物としては伊尾木遺跡出土の銅鐸をあげることができる。銅鐸は弥生時代における集落共同体の祭器であり、集落から離れた山麓部等から発見されることが多いが、伊尾木遺跡も安芸川の東を流れる伊尾木川の左岸山麓部に位置している。

古墳時代以降になると遺跡数も増加するが、やはり調査例が少なく、その内容を十分解明できる状況にはなっていないが、川北地区では須恵器や陶馬等の祭祀遺物が採集されており注目される。戦国時代には土佐の七守護の一人、安芸国虎が安芸地域を支配しており、その居城として安芸城跡が築城されている。安芸城跡は安芸川下流域の平野部に存在する独立丘陵を城としたものであり、安芸川の流れを外濠としていたと考えられる。長宗我部氏の勢力拡大に伴い合戦の結果、安芸氏は滅びて長宗我部氏による土佐一国平定がなされる。近世になると、長宗我部氏に変わり土佐国の領主となった山内氏の家老である五藤家が安芸の領主となり、安芸城跡に居館を造営する。この五藤家屋敷跡では発掘調査が行われており、多量の遺物と近世屋敷の遺構が検出されている。高知県における近世考古学の先駆けとなった調査であった。



# 第 章 調査成果

## 1. 調査の概要と基本層序

今回の調査では、竪穴住居跡4棟を検出した。直径約8mの規模を測る大型住居(ST3)と直径約7mの規模を測る中型住居(ST1)と直径約5mの規模を測る小型住居2棟(ST2・4)で構成される。いずれも平面形は円形である。大型・中型住居では建て替えを確認できる。出土遺物では、弥生土器をはじめ石包丁・石鎌などの石器類、ガラス小玉などである。また、讃岐地域からの搬入土器が確認されている。

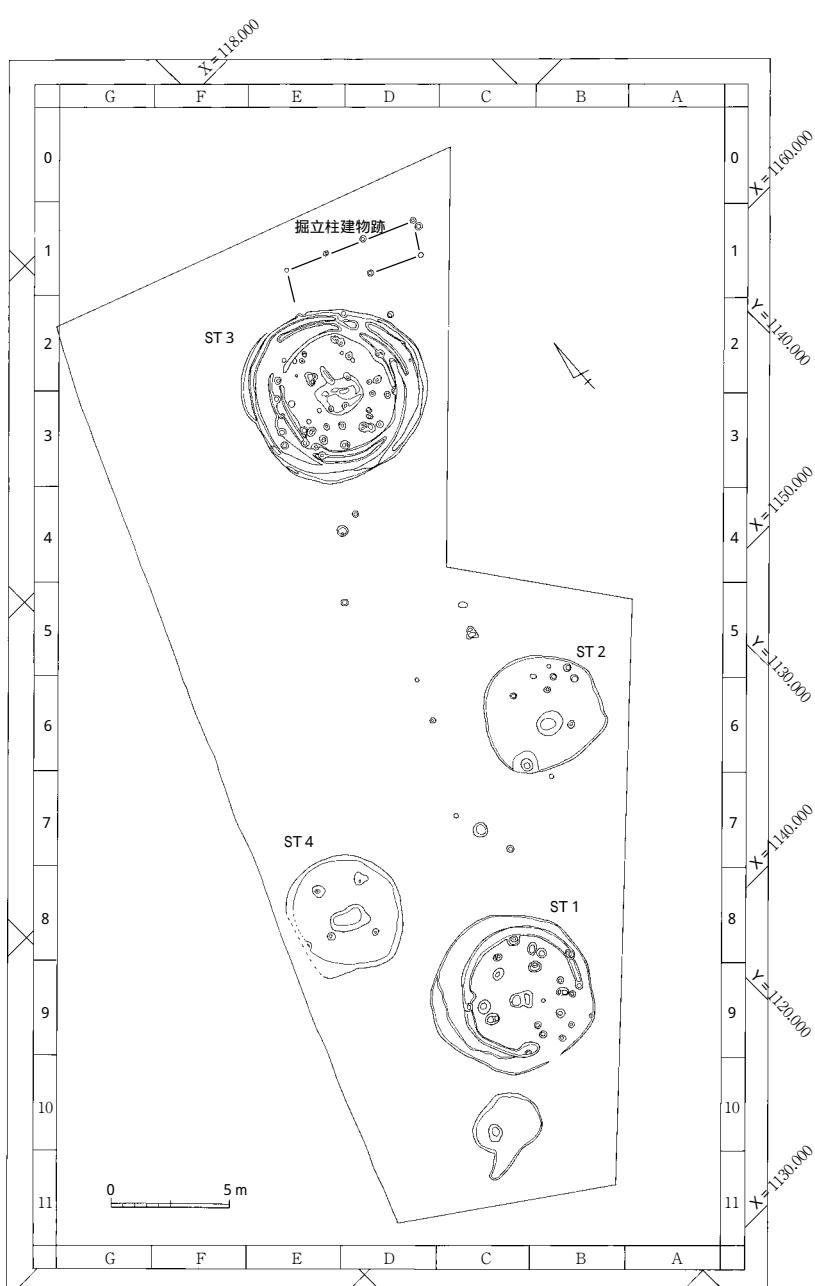


Fig. 7 検出遺構配置図・グリッド図

基本層序は水田耕作土を除去すると遺構検出面であり、遺物包含層は存在せず、土層図は作成することはできなかった。耕作土直下に遺構が検出される状況から見ると削平を受けているのは明らかである。遺構検出面は赤褐色粘土の地山であり、一部には段丘礫層の礫が見られ、旧地形は起伏のある微地形であったことが推定される。

遺構埋土は暗褐色粘土であり、一部のピットは黒褐色土であった。勇前遺跡では確認できなかったが、周辺部の状況から見れば、段丘上に赤ホヤ火山灰の土壤化した黒色土が部分的に存在するものと考えられる。

## 2. 検出遺構と出土遺物

### (1) ST 1

ST 1は調査区の南半部において検出されている。直径約6.6mを測る中型の円形竪穴住居跡であり、残存する深さは5～10cmと非常に浅い。住居跡の西半部は礫層になっており、床面にも多量の地山礫がみられる。住居跡内ではピットが23個検出されており、中央部には中央ピットが存在する。中央ピットは不整円形であり、一部に方形の段部がみられる。柱穴は3個ほど切り合っているもののが存在しており、最低1回の柱の建て替えがあったものと考えられる。同時に壁溝も一部が壁に接しているが、住居跡の3/4ほどを巡る壁溝は壁から内側に40～90cmほど離れており、建て替えを行

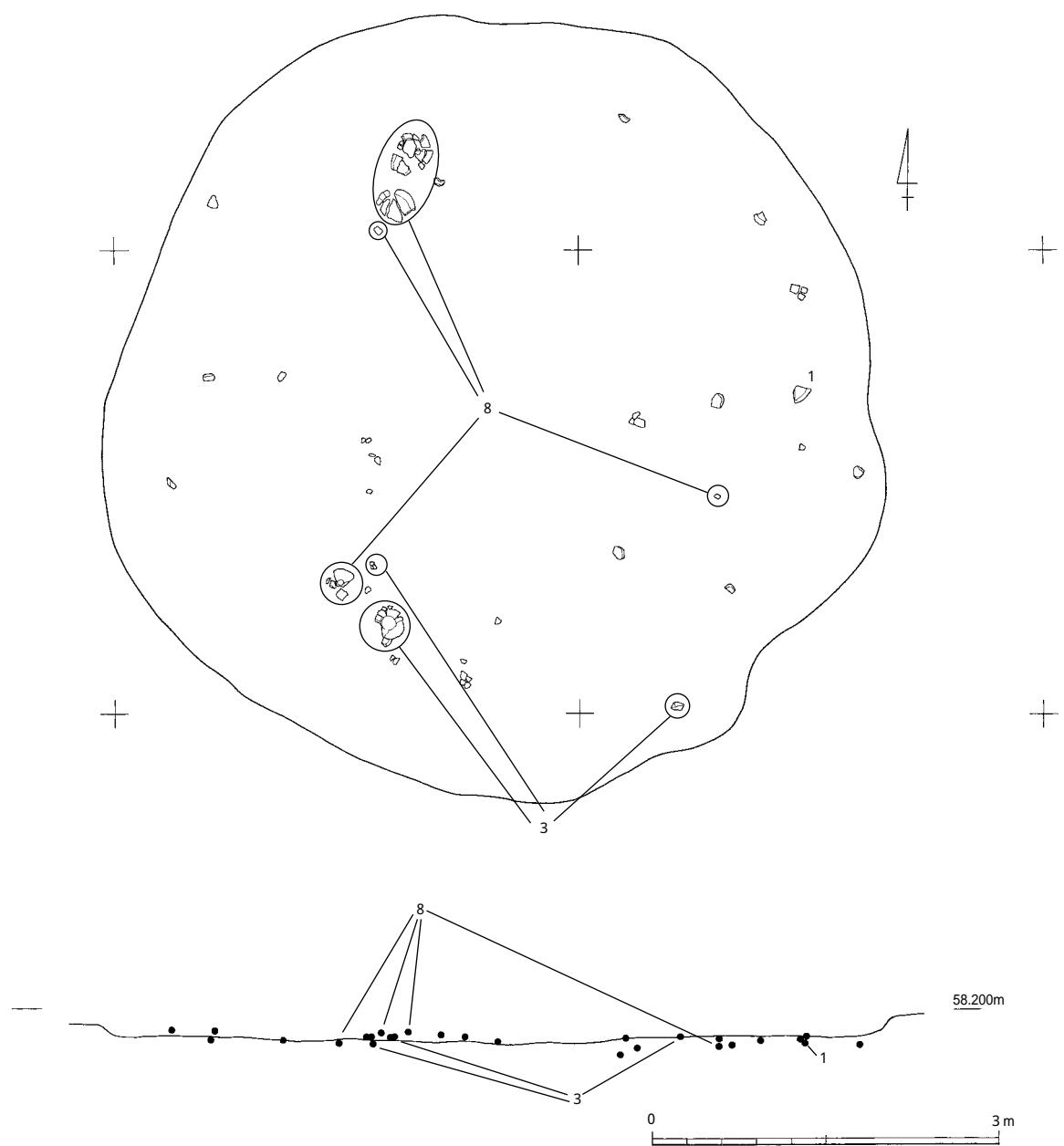


Fig. 8 ST 1 遺物出土状況図

った時に拡張したものとみられる。このことからすると、当初の竪穴住居跡は直径5.4mのやや小型であったが、西半部への拡張の結果、直径6.6mとやや大型の住居跡となったものと考えられる。住居跡の埋土は暗褐色土であり、中央ピット及び柱穴の埋土も同様に暗褐色土であった。

出土遺物は1～8である。1は広口壺である。口縁部下端に断面三角形状に粘土帯を貼付し、口唇部を拡張する。拡張した口唇部に四条の凹線文を巡らせる。上端と下端の凹線文は弱く、沈線状を呈しているが、中央の凹線文は比較的明瞭に施されている。2は甕である。口縁部は断面三角形状の粘土帯を貼付し口唇部を拡張する。口唇部はヨコナデ調整を施す。内面は頸部直下までヘラケズリ調整を施す。3は甕である。口縁部は「く」の字状を呈する。口唇部は僅かに肥厚させる程度

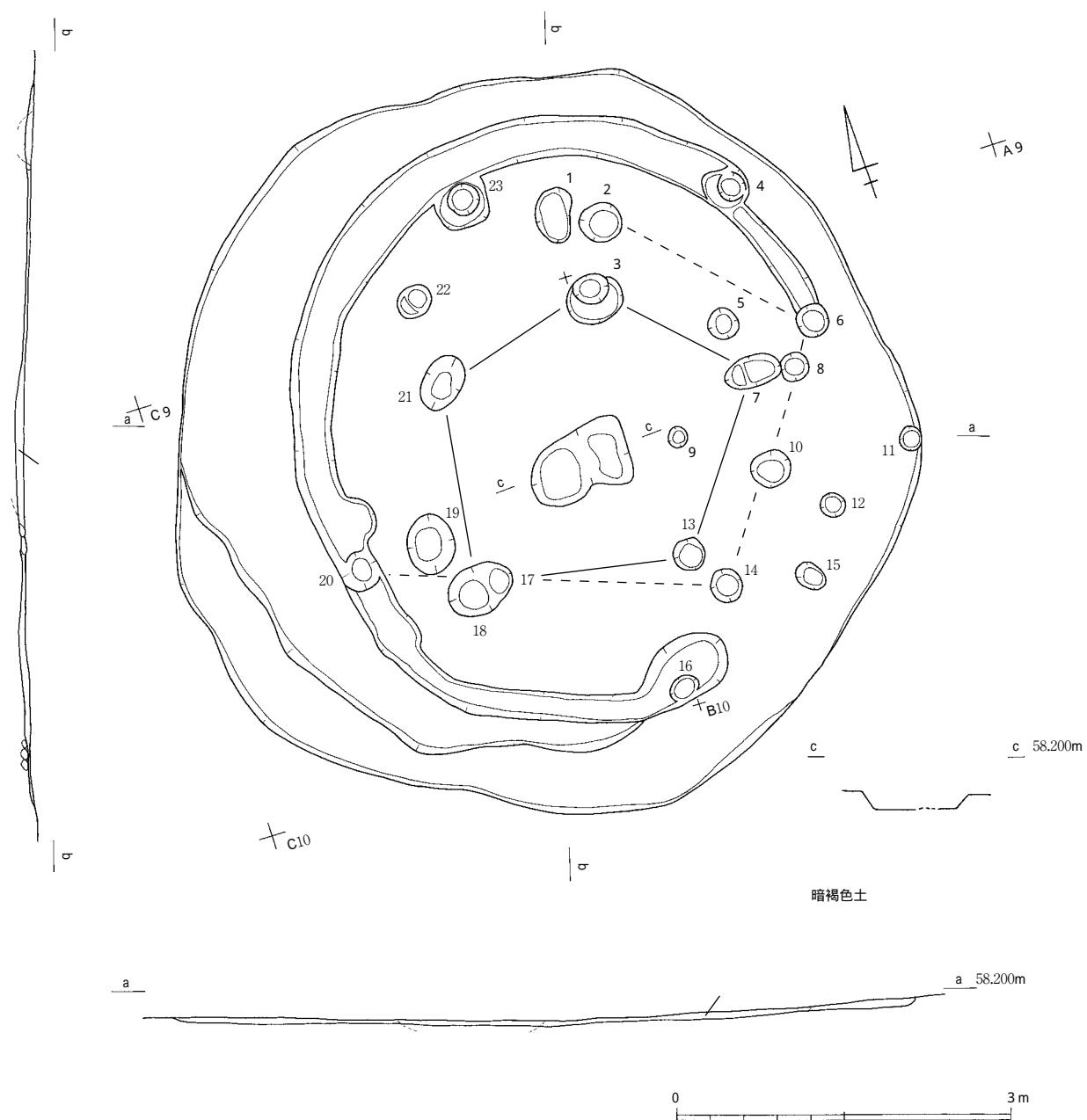


Fig. 9 ST 1 平面図・断面図

Tab. 1 ST 1 ピット法量表

ピット No.	直径	深さ	遺物 出土 ピット												
1	48×31	21		7	50×29	23	P 6	13	28	16		19	42	20	P 4
2	39	24		8	24	25	P 5	14	29	18		20	34	20	
3	45	30	P 3	9	17	14		15	28×22	10		21	52×34	16	
4	38	35	P 2	10	36	8		16	28	3		22	32×27	14	
5	27	12		11	20	18		17	20	19		23	43	31	
6	29	32	P 1	12	22	6		18	44	26					

注) 遺物出土ピット欄に記載したPxは遺物が出土したピットで遺物観察表の出土土地点に対応している。尚、ピットNoは整理作業時に付けたものである。Tab. 2・3についても同様である。

(cm)

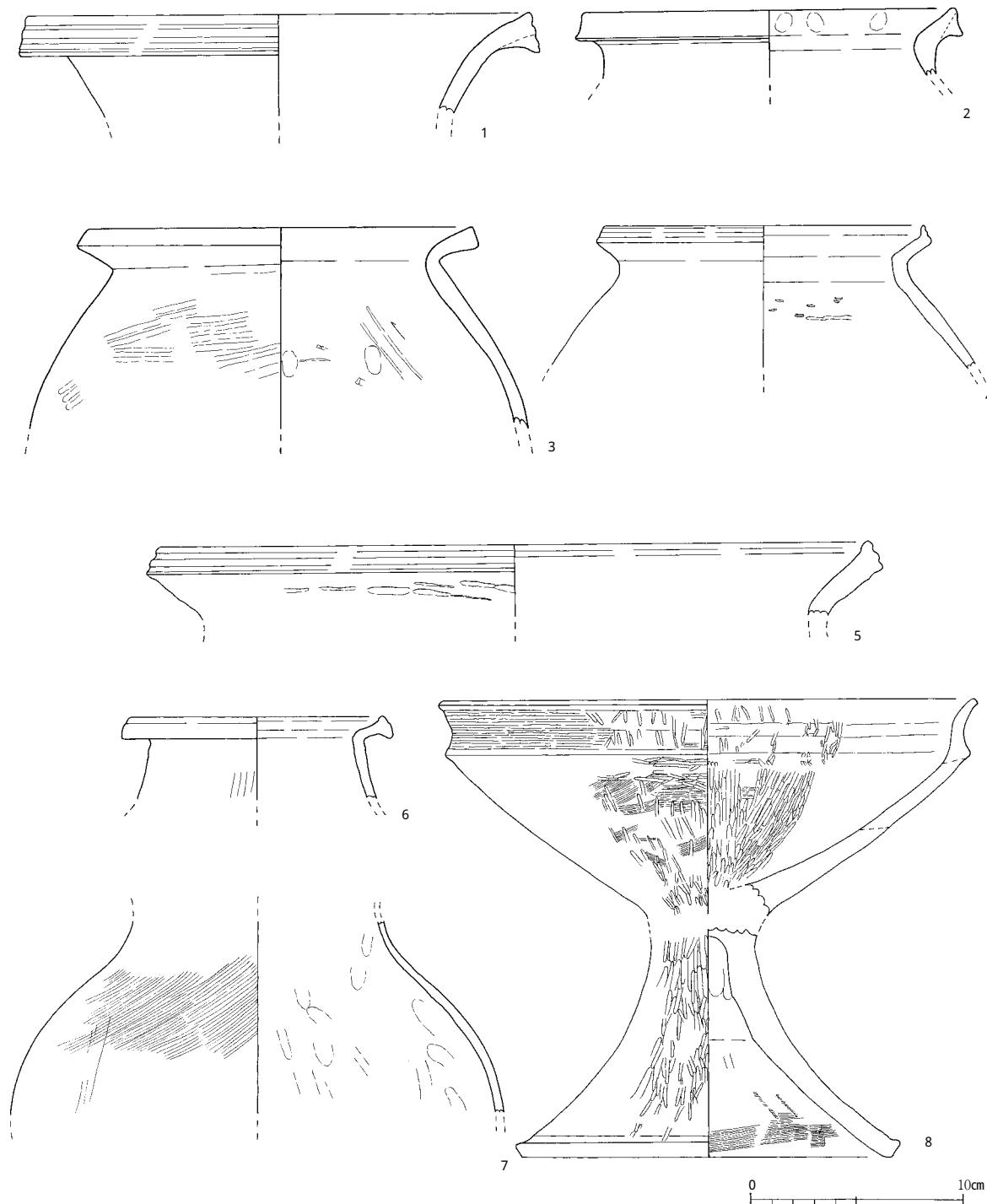
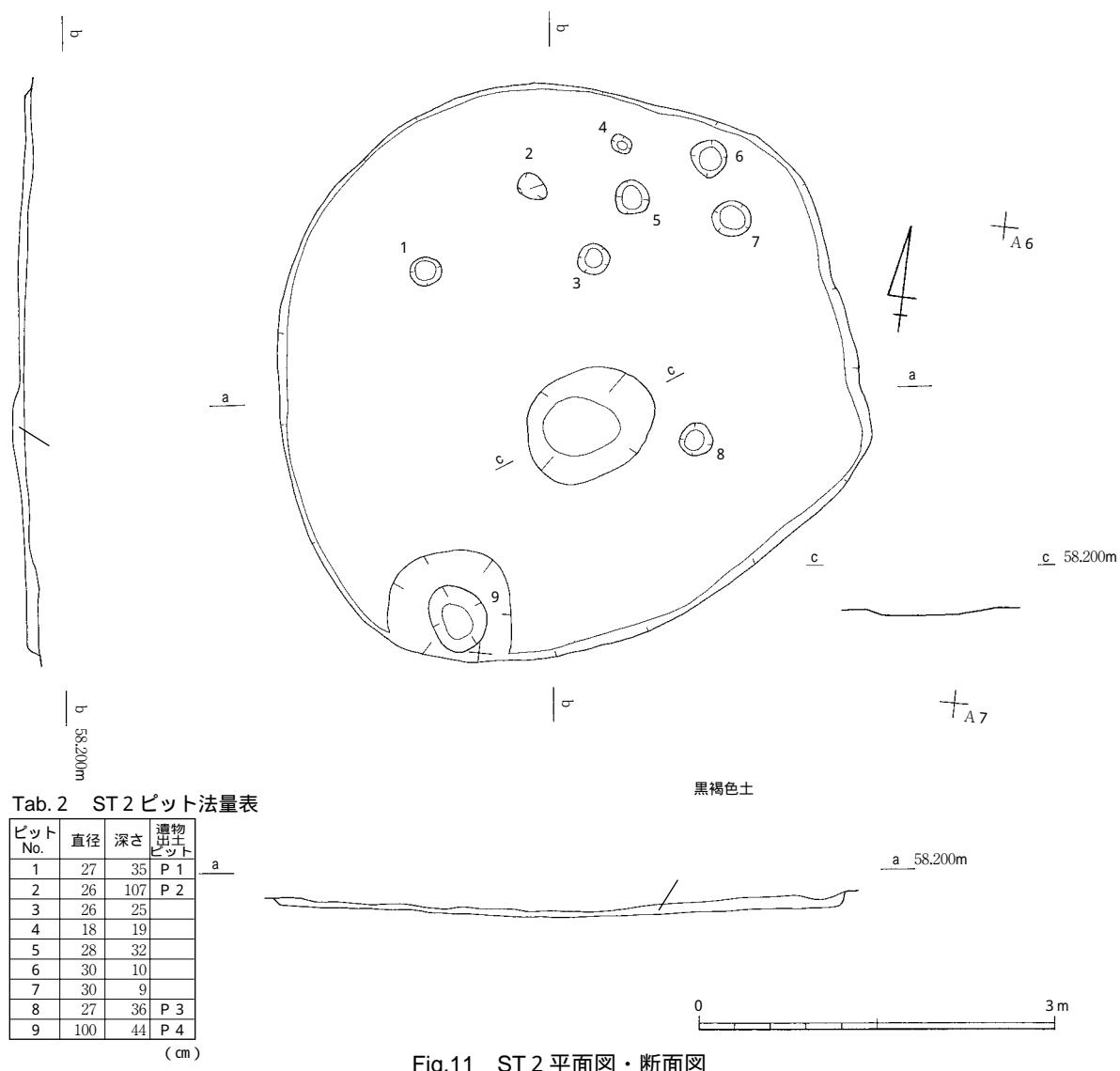


Fig.10 ST 1 出土遺物実測図

であり、明瞭な凹線文は認められない。外面はナデ調整、ハケ調整が施されるが叩き目が若干残存する。内面は頸部直下付近までヘラケズリ調整が施される。外面に煤が付着する。4は甕である。口縁部を上方へ摘み上げ拡張し、二から三条の凹線文を巡らせる。内面には指頭圧痕及び爪状の圧痕が認められる。頸部直下までヘラケズリ調整が施される。讃岐地域からの搬入品である。5は鉢である。口縁部を上方へ摘み上げ拡張し、二条の比較的しっかりとした凹線文を巡らせる。外面は叩き成形後、ナデ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施す。6は甕である。口縁部を上方と下方に拡張し、退化した凹線文を施す。外面は縦方向のヘラ状工具により調整される。讃岐地域からの搬入品である。外面に煤が付着する。7は甕である。直線気味の頸部から体部は大きくひらく。内面は指頭圧根が顕著に認められる。外面は斜め方向のハケ調整である。讃岐地域からの搬入品である。外面に煤が付着する。8は高杯である。やや深めの杯部に外反する口縁部がつく、口唇部は面取りし方形に仕上げる。内面は放射状にヘラ磨き調整、外面は放射状と横方向にヘラ磨き調整を施す。脚部は「ハ」の字状に大きくひらく、端部は面取りしごく僅かではあるが、上方に摘み上げる。内面はハケ調整を、外面はヘラミガキ調整を施す。分割成形技法である。



## ( 2 ) ST 2

ST 2 は調査区の中央部において検出されている。直径4.8mを測る小型の円形豎穴住居跡であり、深さは10~15cmと浅い。ピットは9個検出されており、中央部には中央ピットが存在している。また南辺部には土坑状のピットも存在しているが、非常に深く、住居跡の埋土に比較するとやや灰色を帯びた褐色土であり、住居跡に伴うものではなく、後世の掘り込みと考えられる。また、ピットについてもその一部は深さ1mほどあり、やはり住居跡の柱穴と考えるには異常に深く、他の遺構の切り合いと考えたい。埋土は黒褐色土であり、中央ピットについても同様な埋土であった。また、壁溝は確認されず、柱穴配置も北に偏っており、小型であることからすれば、居住よりも工房等の他の機能をもつ豎穴であった可能性が強い。

出土遺物は9~14である。9は甕である。頸部は丸味を持ち屈曲する。口縁部を下方に拡張し、口唇部に二条の退化した凹線文を施す。内面は頸部直下までヘラケズリ調整を施す。外面は叩き成形後、ハケ調整を施す。僅かに叩き目を残す。11は絵画土器の可能性がある体部片であり、3条の沈線で描かれている。12は鉢の底部である。直径3cm程度の底部から大きく直線的に立ち上がる。内面にはくもの巣状にハケ調整を施す。14は鉢である。直径3cm程度のやや突出した底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖らせる。外面底部には凹凸がある。内面はヨコナデ後、放射状にナデ調整を施す。外面は底部付近には叩き目が残存するが、ナデ調整のため不明瞭である。上半部はヘラミガキ調整である。

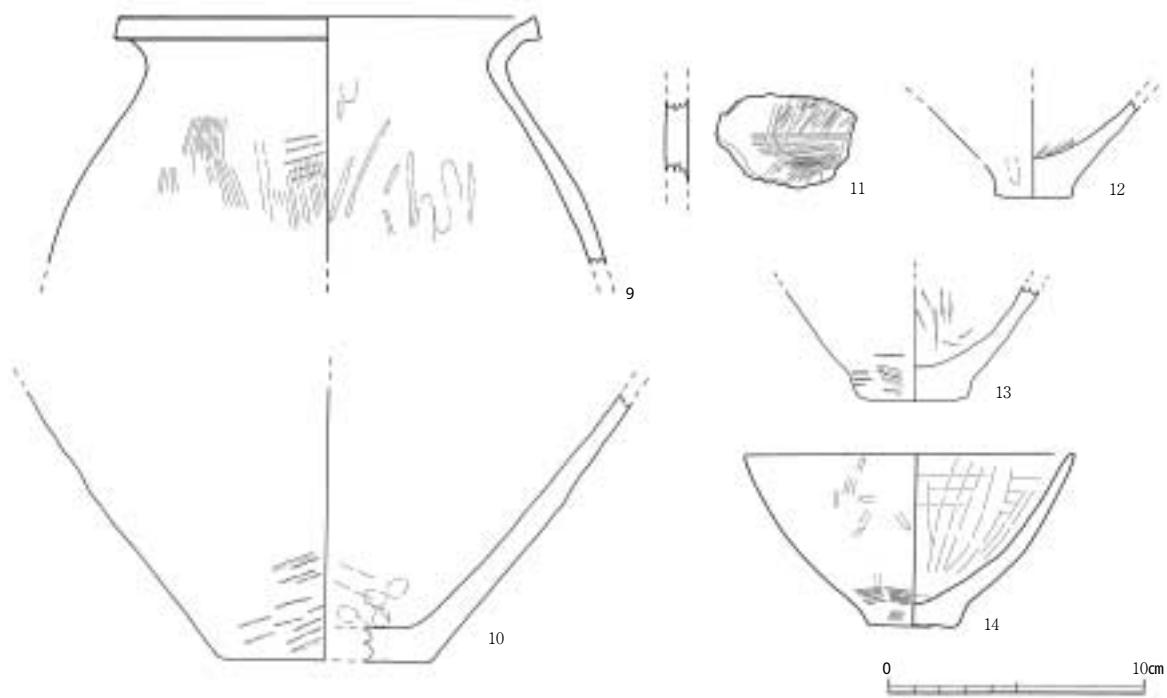


Fig.12 ST 2 出土遺物実測図

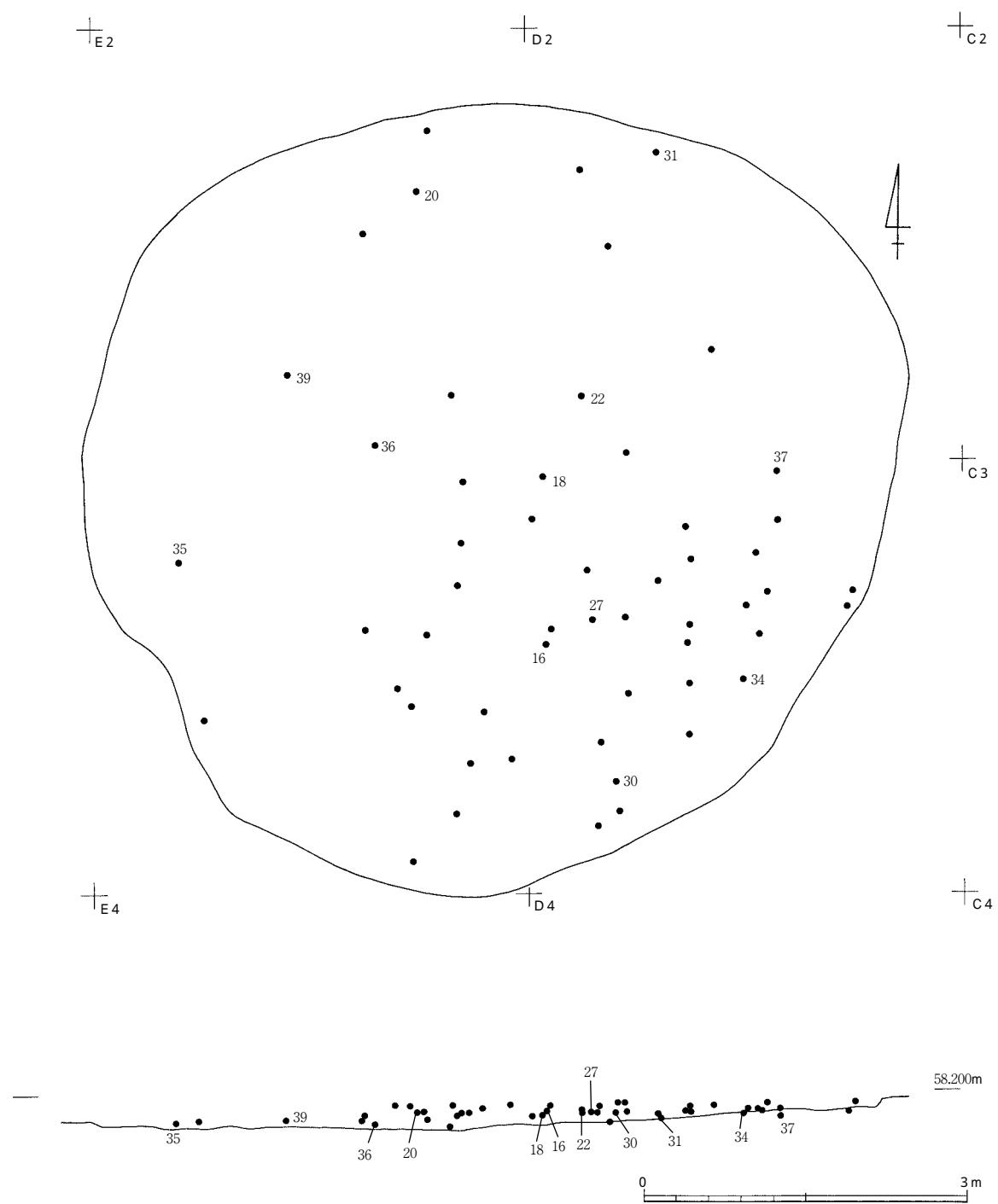


Fig.13 ST 3 遺物出土ドットマップ

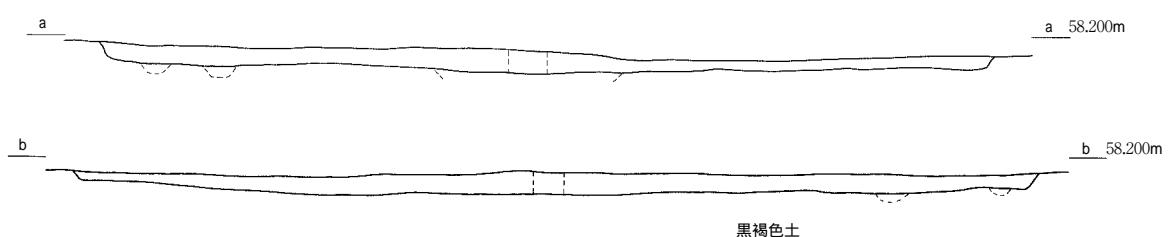
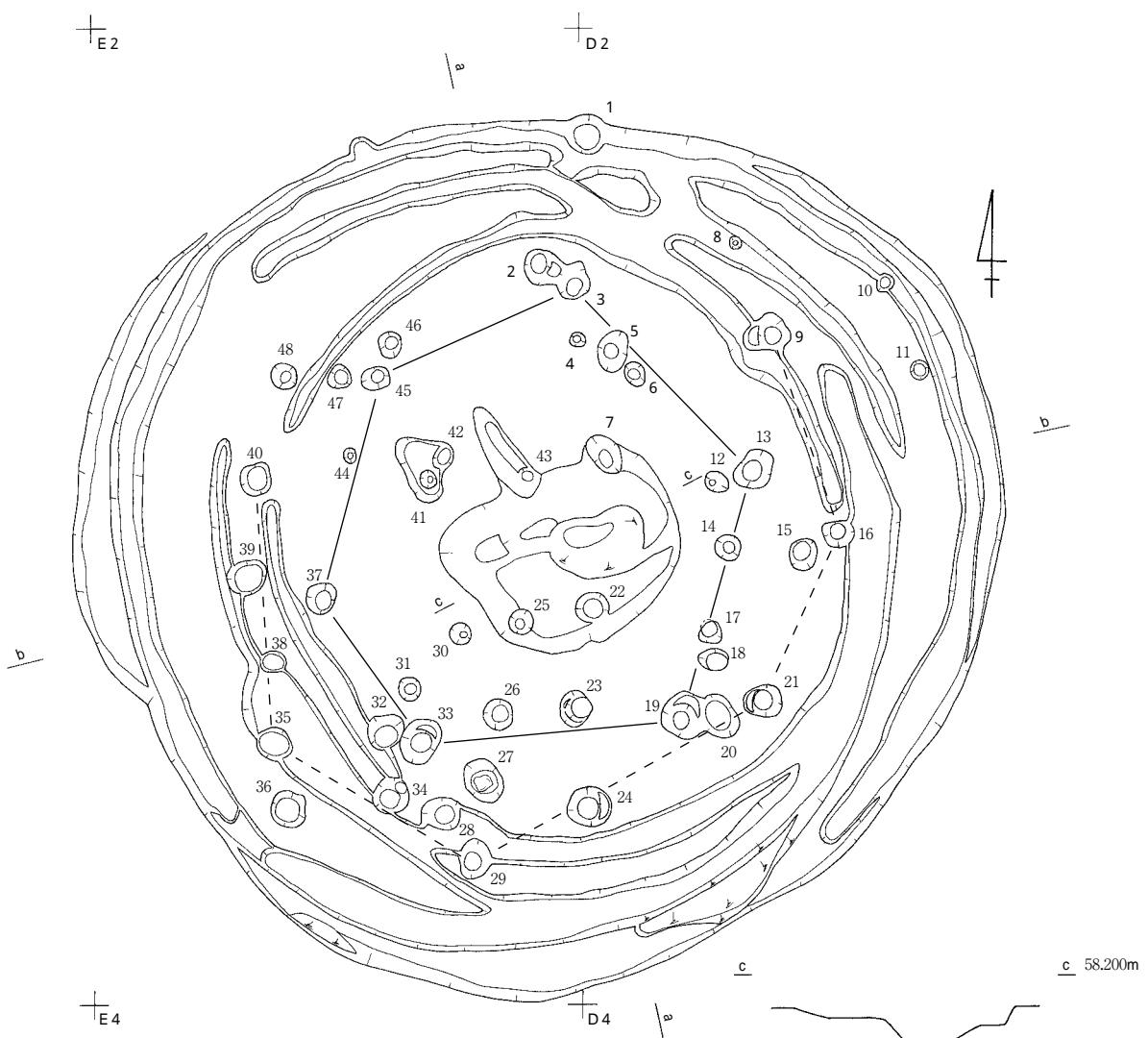


Fig.14 ST 3 平面図・断面図

0 3 m

Tab. 3 ST 3 ピット法量表

ピット No.	直径	深さ	遺物 出土 ピット																				
1	32	36		9	40×30	35		17	19	35		25	20	23		33	38×29	23	P 2	41	18	14	
2	30	40		10	15	18		18	25×18	18		26	24	43		34	30	47		42	16	18	
3	27	33	P 6	11	16	2		19	37	50	P 9	27	37×28	21		35	30	26	P 3	43	85×26	23	
4	10	19		12	20×15	11		20	36×28	41		28	30	29		36	30	31		44	10	23	
5	35×25	22		13	34×25	45		21	30×26	41	P 8	29	31	29	P 1	37	27	45	P 4	45	18	24	
6	20	23		14	31	32		22	25	18		30	17	21		38	21	39		46	18	21	
7	36×23	26		15	28	42		23	26	47		31	17	50		39	32	34		47	20	11	
8	10	11		16	24	52	P 7	24	36	47		32	31	45		40	25	6	P 5	48	20	21	

(cm)

## ( 3 ) ST 3

ST 3 は調査区の北部において検出された竪穴住居跡であり、直径約 8 m を測る大型の円形住居跡である。深さは 20cm 前後と ST 1・2 より深く、床面の遺存状態は今回検出された住居跡の中では最も良好である。柱穴 48 個と中央ピットが確認されており、今回検出された竪穴住居跡の中では最も多い。主柱穴と考えられる柱穴は 10 個ほど確認され、何れも直径 30~40cm、深さ 30~50cm と非常にしっかりとしたものである。その中で 3 個の柱穴は 2 個が切り合うか隣接しており、柱穴から見る限り 1 回の建て替えを観察することができる。中央ピットは長径 1.8m、短径 1.2m の不整橢円形であり、底部は 2 段の小平坦面を持っている。また、内部に 3 個のピットも確認されており、一部には溝状の掘り込みも付属している。中央ピットの形状の点においても他の竪穴住居跡との違いを見ることができる。壁溝は複雑に切り合い数条が巡っており、拡張の跡が見て取れる。拡張は 3 回行われたと考えられ、最も内側の壁溝は直径 4.8m、その外側に直径 5.4m、さらに外縁に直径 6.5 m の円を示しており、最終壁溝は壁に付いて検出されている。拡張はほぼ同心円状に行われたと考えられるが、やや東西方向に広がっている。壁溝から見た拡張回数と柱穴の建て替え回数が合致しない点については、短期間の拡張時には柱の建て替えが行われず、規模の大きい拡張時には柱穴を全面的に移動した結果と考えられる。埋土は黒褐色土であり、柱穴、中央ピット、壁溝もほぼ同様の埋土であった。

出土遺物は 15~39 である。15 は直口壺である。口縁部外面には二条の凹線状の沈線が巡る。17 は直口壺である。内面には指頭圧痕、粘土接合痕跡が残存する。外面はヘラミガキ調整を丁寧に施す。18 は短頸の広口壺である。口縁部を上下に拡張し、二条の凹線文を巡らせる。摩耗が激しく調整は不明である。19 は広口壺である。口縁部は緩やかにひろがり、口唇部は凹面上に仕上げる。摩耗が激しく詳細な調整は不明であるが、全体的に指頭圧痕が目立つ。20 は短頸の直口壺である。緩やかな頸部から口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。口唇部は上下に拡張し、外傾した面をなす。摩耗が激しく詳細な観察は難しいが、口唇部には退化した凹線文が施されていたものと推定される。また、五条以上とみられる一単位の沈線文を施す。21 は甕である。口縁部は上下に拡張し、口唇部に二条の退化した凹線文を施す。内面には指頭圧痕が認められる。讃岐地域からの搬入品である。22 は甕である。頸部の内面は丸味を持ち屈曲する。一方、外面は直線的に立ち上がり、頸部と胴部の境目に二条の沈線が施される。口縁端部は斜め下方に摘み出し「へ」の字状を呈する。内面は頸部のやや下がった位置まで横方向のヘラケズリ調整を施す。外面には叩き目が比較的明瞭に残存する。26 は器台である。口縁部は主に下方に拡張する。口唇部には一条の凹線文と四条の沈線を巡らせ、半載竹管文を施す。外面は縦方向のハケ調整である。27 は蓋である。把手は中実であり、端部は丸味を帯びる。笠部はほぼ水平に大きくひらき、端部は尖らせる。28 は把手である。断面形は扁平な橢円形を呈する。全体的にナデ調整を施す。29 は鉢である。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖らせる。内面はハケ調整を施す。外面は底部付近に叩き目が認められるが、ナデ調整、ハケ調整が丁寧に施されている。30 は鉢である。口径に比較し器高が高く、体部が直線的にのびる。底部には斜め外方にふんばった脚がつく。31 はほぼ完形の磨製石包丁である。両刃の直線刃であり、中央部に両面から一穴が穿たれる。34 は石包丁の未製品であり、扁平に荒割りされた素材の一部には整形剥離が施されている。35・36 は

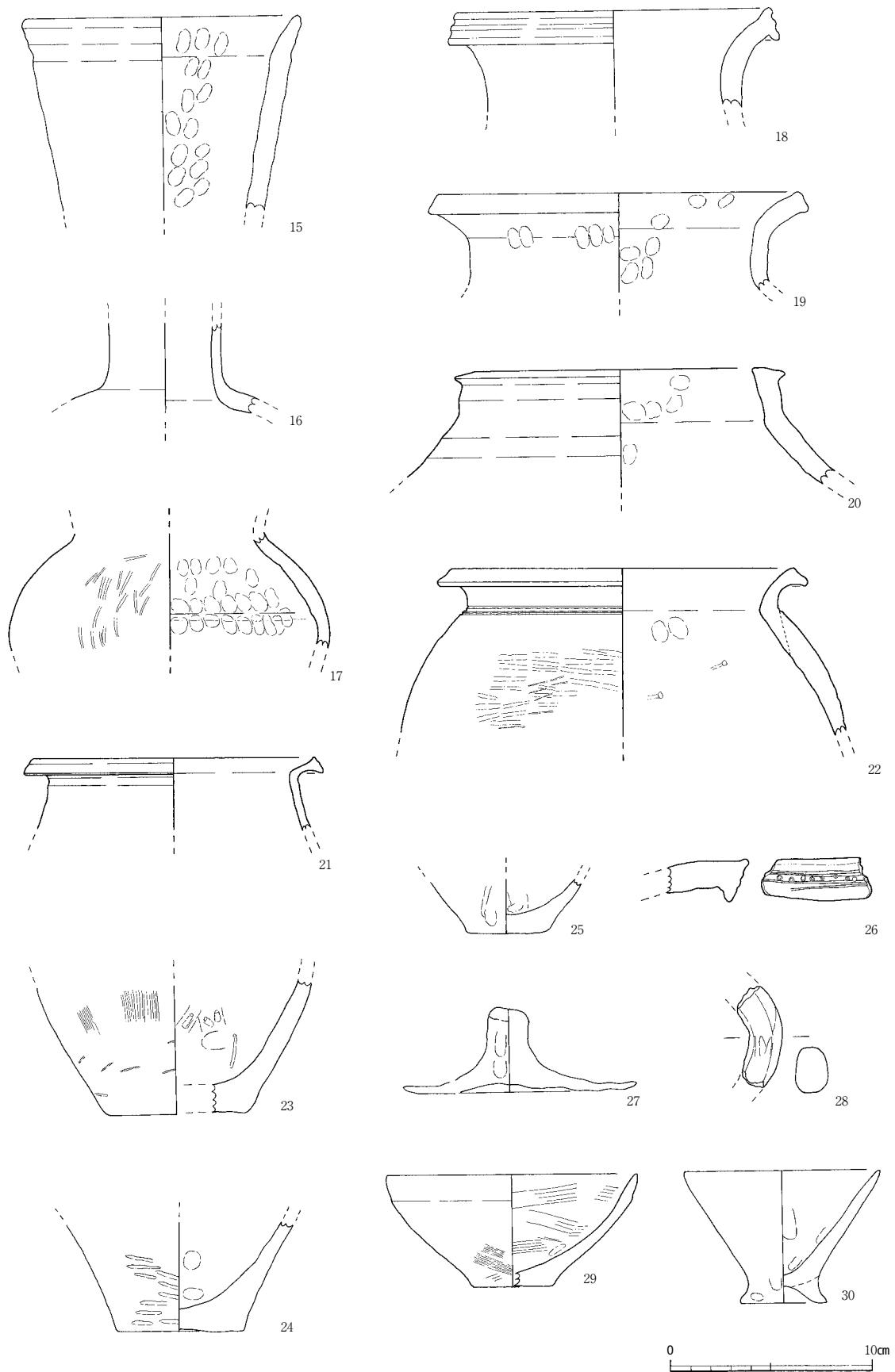


Fig.15 ST 3 出土遺物実測図〔1〕

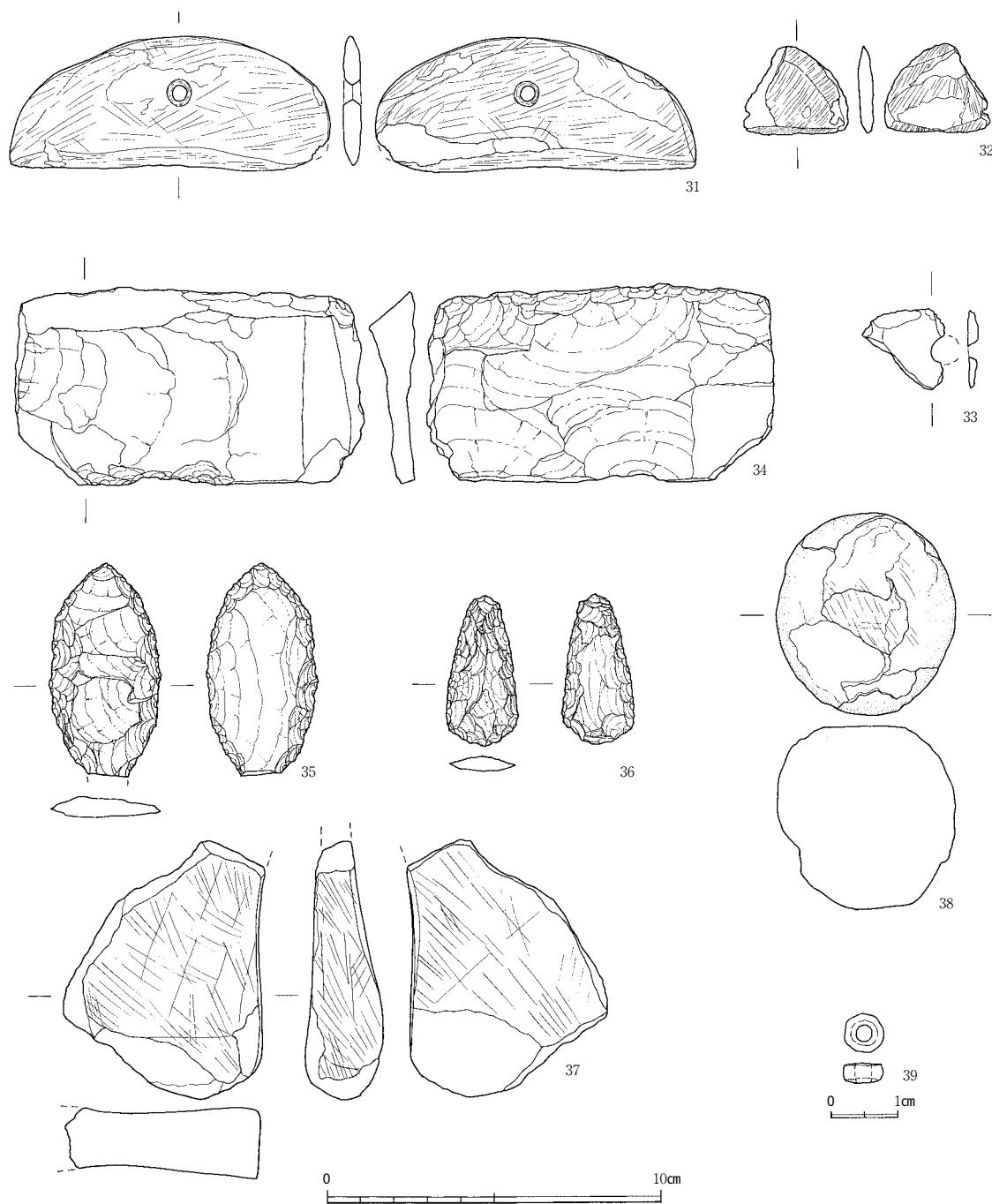


Fig.16 ST 3 出土遺物実測図〔2〕

サヌカイト製の打製石鎌である。35は茎を欠損する。38は球形を呈する石であるが性格については不明である。被熱によるものなのか全体的に黒褐色を呈し、表面の一部は薄く剥離している。これらの他にサヌカイトの剥片 3 点が出土しており、石鎌の製作が行われていたものと考えられる。39はガラス小玉である。平面形は多角形を呈し、色調はコバルトブルーである。

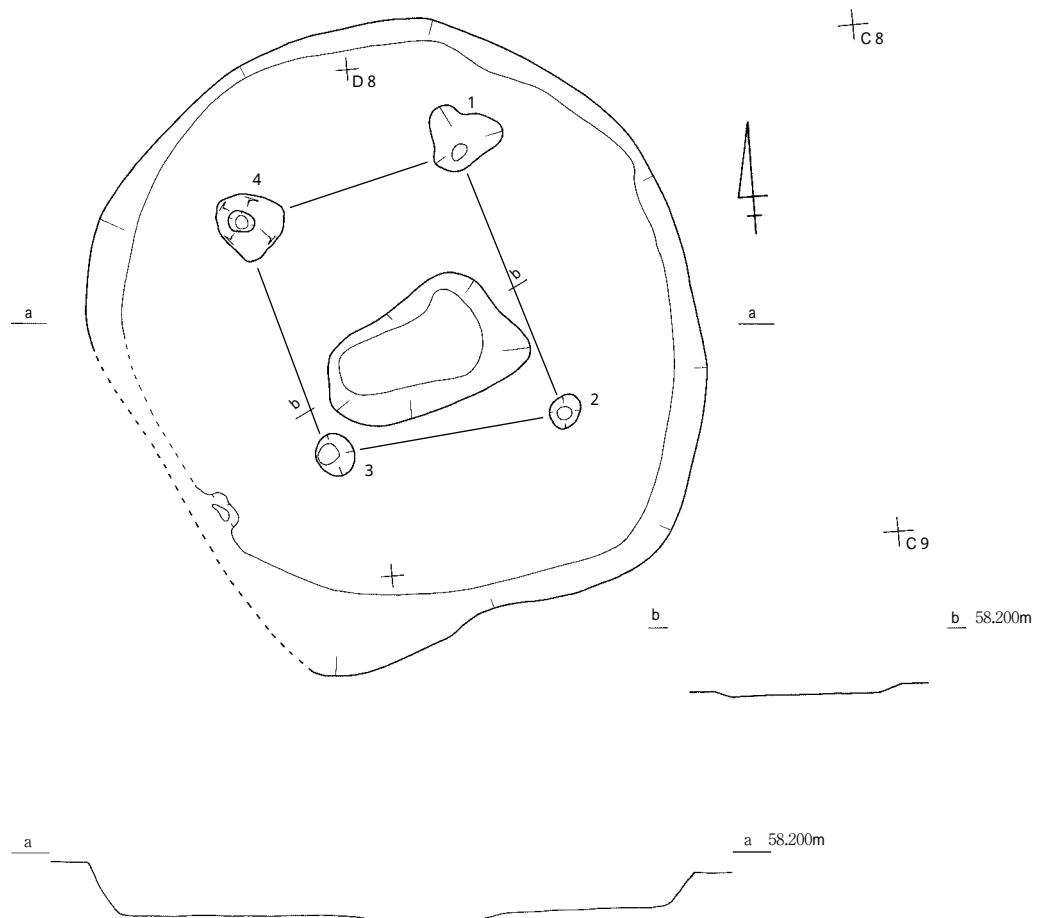
## (4) ST 4

ST 4 は調査区の西端部に一部がかかり検出されている。検出当初は黒色土の不明瞭なプランであり、竪穴住居跡として認識されなかったが、掘り下げの結果、床面が確認され、柱穴及び中央ピ

ットが検出されたことにより、竪穴住居跡であることが確定した。ST 4 の検出された場所は地山の礫層が分布しており、礫層を掘り抜き住居跡が造られていた。その結果、削平による影響はあまり大きくなく、深さは約50cmとかなり残っていた。平面形は直径約5mの円形であり、4個の柱穴と中央ピットが検出されている。柱穴は直径20~50cmと違いが見られるが、深さは20cm前後とほぼ同じである。中央ピットは長軸1.6m、短軸1mの不整方形であり、深さは約30cmを測る。埋土は2層に分けられ、上は黒褐色土、下層は灰黒褐色土であり、中央部では上層がかなり落ち込み、中央ピットにも一部入り込んでいる。

遺物は今回検出された竪穴住居跡の中では最も多く出土しているが、床面上のものは少なく、大半は埋土中であった。出土状況では大形の破片も出土するが、細片も多く、やや2次堆積的な出土状況ではないかと考えられ、遺物の出土状況や埋土の状況、さらに調査区西端部は下段の水田と50cm程度の比高差がある等からも上部は攪乱を受けている可能性が強い。

出土遺物は40~49である。40は壺である。40は壺である。口縁端部をヨコナデ調整により若干外反させ、口唇部



Tab. 4 ST 4 ピット法量表

ピット No.	直径	深さ
1	50	19
2	25	27
3	31	23
4	20	28

(cm)

Fig.17 ST 4 平面図・エレベーション図

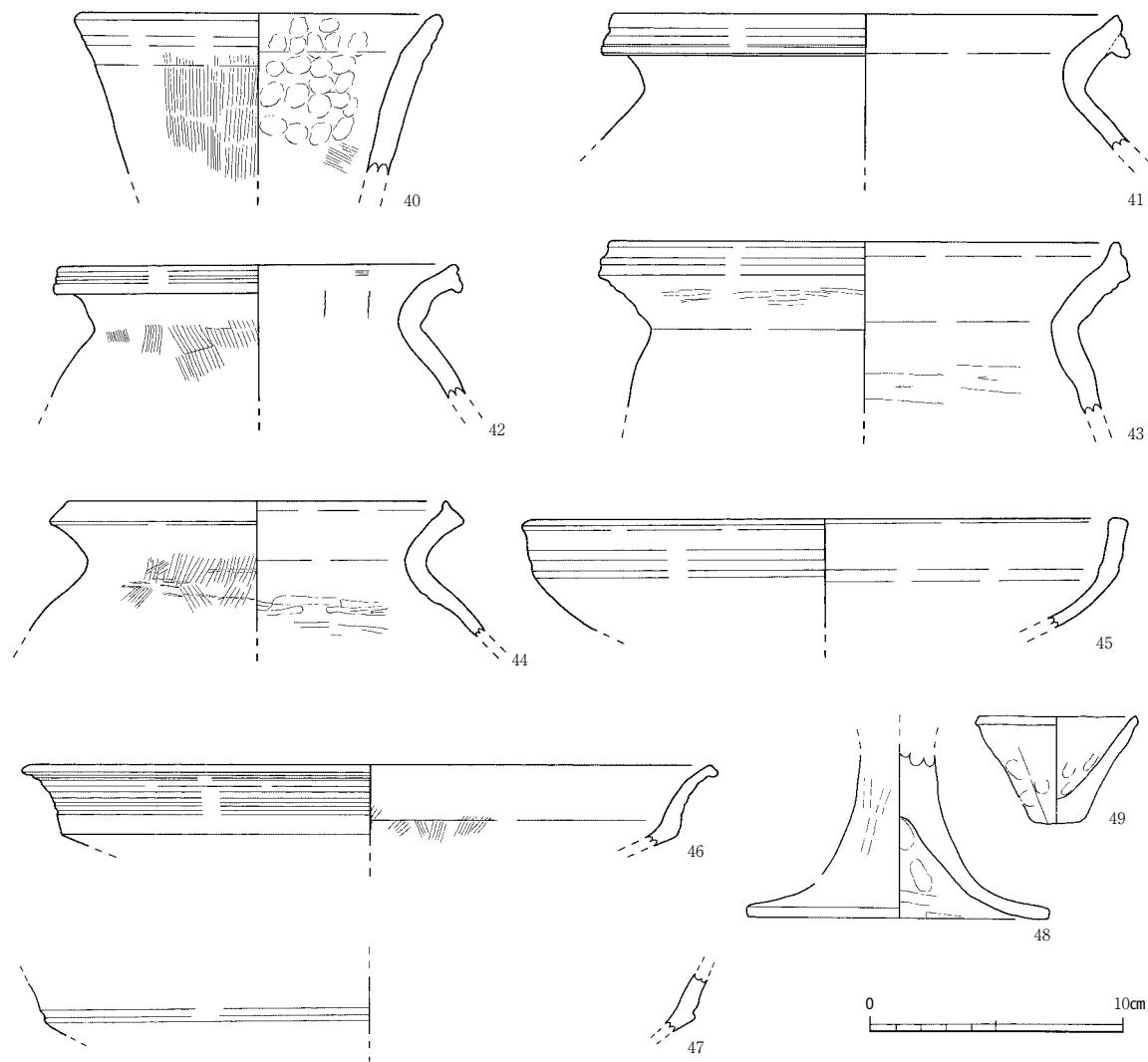


Fig.18 ST 4 出土遺物実測図

は丸くおさめる。外面タテハケ調整を施す。また、口縁部にくずれた凹線文を二条ないし三条巡らせる。41は甕である。口縁部は緩やかな「く」の字に屈曲する。口縁部外面に断面三角形に貼付し、口唇部を拡張する。口唇部に二条の凹線文を施す。42は甕である。口縁部は緩やかに屈曲し、口唇部を下方に拡張させ、凹線文を二条巡らせる。口縁部内面に絞り目が認められる。43は甕である。口縁部を上方へ摘み上げ拡張し、二条の比較的しっかりとした凹線文を巡らせる。外面は叩き成形後、ナデ調整を施し、内面は横方向にヘラケズリ調整を施す。44は甕である。口縁部は緩やかな「く」の字状を呈し、口唇部を上方に摘み出し、下方を僅かに肥厚させる。内面は横方向のヘラケズリ調整を施す。外面は叩き成形後、丁寧にハケ調整及びナデ調整を施すが僅かに叩き目が残存する。比較的丁寧なつくりである。45は高杯である。口縁部はほぼ直立し、口唇部は平坦に仕上げる。外面には二条の弱い凹線文を巡らせる。46は高杯である。口縁部は比較的シャープな稜を持ち外反し、口唇部は平坦面をなし外端部は突出する。外面には五から六条の凹線文が巡る。48は高杯である。脚部上端から緩やかにひろがり、端部付近で大きくひろがる。内外面はナデ調整である。分割

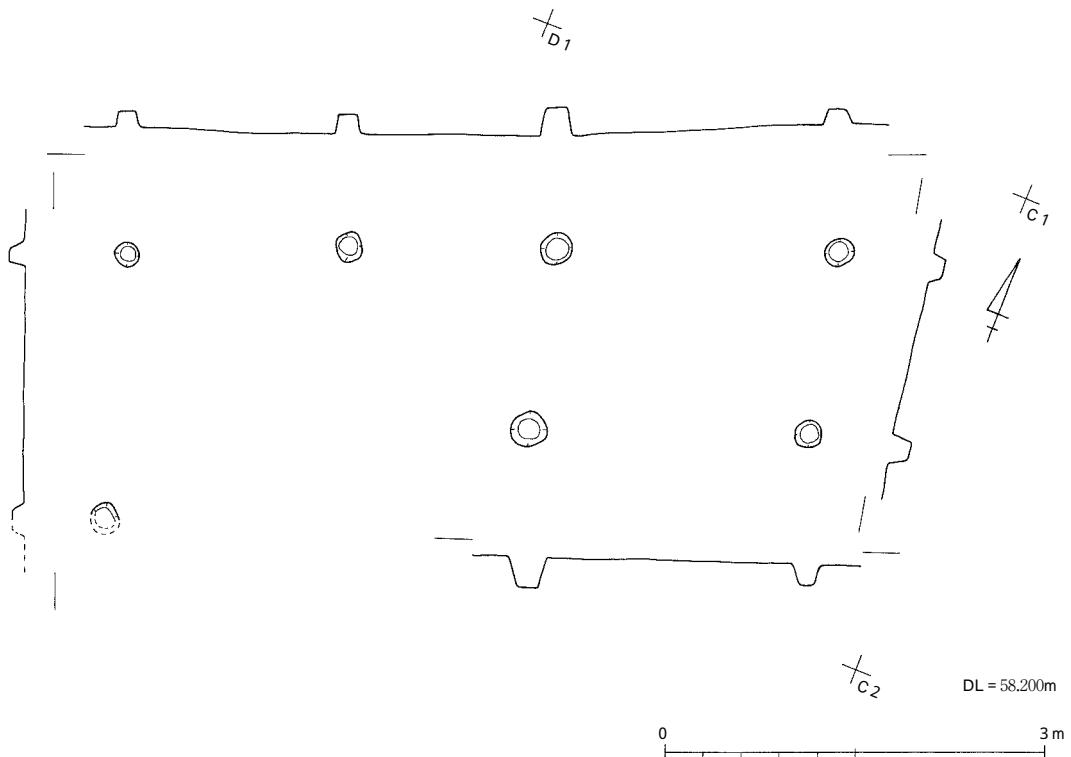


Fig.19 掘立柱建物跡平面図・エレベーション図

成形である。49はミニチュア土器である。口径に対しやや器高の高い器形を呈する。内外面とも丁寧なナデ調整が施されるが、外面には叩き目がごく弱く残存する。

#### ( 5 ) 掘立柱建物跡

調査区の北西部で検出した。1間×3間に復元することができるが、調査区外へさらにのびる可能性もある。柱穴は直径約20cm、深さ約15cmである。柱穴間の心々間距離は約1.1～1.5mである。出土遺物はなく、具体的な時期決定はできなかったが、黒色土の埋土であり古代の可能性がある。

#### ( 6 ) その他のピット

調査区の北部にまとまってピット群が検出されており、掘立柱建物跡の存在が考えられる。柱穴は直径20cm前後、深さも約20cmと浅く、竪穴住居跡の柱穴群に比べ小型である。また、埋土も暗黒褐色土であり、竪穴住居跡の埋土を切っているものも確認されていることから、弥生時代の所産ではなく、それ以降の掘立柱建物と考えられるが、出土遺物がなく、具体的な時期決定はできなかった。

#### ( 7 ) 試掘調査出土遺物

試掘確認調査では竪穴住居跡およびピット等を確認したが、遺物包含層が存在しないこともあり、出土遺物は僅少であった。50は壺である。口縁部に断面三角形の粘土帯を貼付する。弱いながら粘土帯の接合痕跡を観察できる。

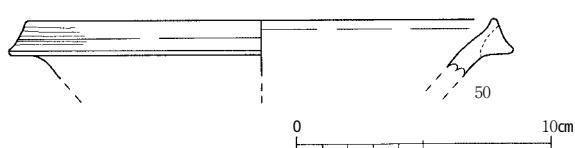


Fig.20 試掘調査出土遺物実測図

# 第 章 まとめ

## 1. 土器について

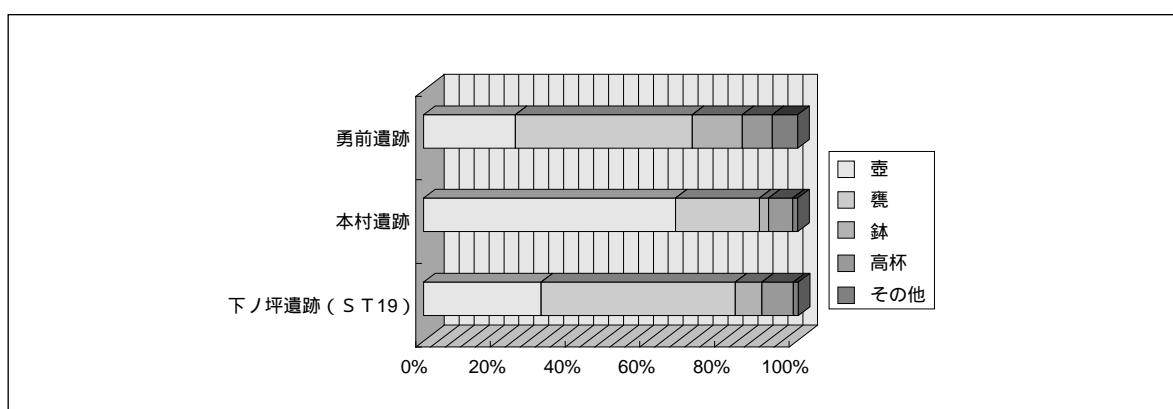
高知県東部においては、調査例が少なく土器編年などの検討は十分行われてこなかった。ここでは勇前遺跡で得られた資料の位置付けを中心に既往の資料との比較検討をおこない、諸特徴の抽出を試みたい。

器種は壺形土器（以下では、「形土器」を省略する。）甕、高杯、鉢、器台である。器種組成比率はTab. 5 の通りである<sup>1</sup>。高知平野の器種組成比率と比較すると、一期の本村遺跡では壺が67.3%、甕が22.8%、鉢が2.4%、高杯が6.4%、その他が1.1%である<sup>2</sup>。二期の下ノ坪遺跡（ST19）では壺が31.6%、甕が51.6%、鉢が7.4%、高杯が8.4%、その他が1.0%である<sup>3</sup>。中期（一期）から後期（二期）への変化については壺の組成比率が約6割であったものが約3割にまで減少し、その一方で甕が約2割であったものが約5割にまで増加している<sup>4</sup>。したがって、勇前遺跡の器種別組成比率は後期的な割合を示している。

次に各器種毎にみてみる。壺は土器全体の24%である。広口壺、直口壺、短頸壺に細分できる。出土量も少なく、バリエーションも少ない。広口壺は大きく外反するタイプとあまり外反しないタイプがあり、それぞれは凹線文の有無でさらに細分できる。直口壺は頸部から口縁部が直線的にのびる。口縁部外面に非常に弱い凹線文がめぐる。短頸壺の頸部は内傾気味に短くのび、口唇部は平坦に仕上げられ、凹線文が施される。

甕は土器全体の47%である。口頸部が「く」の字状を呈するものがすべてである。形態、口縁部の拡張の有無、口頸部の屈曲度合い、凹線文の有無で細分可能である。形態ではなで肩を呈するもの、上胴部が張るもの等があり、後者が大部分である。口縁部の拡張は上方のみ、下方のみ、上下ともに拡張されるもの、肥厚させるのみのもの等である。口頸部の屈曲度合いは水平近くまで屈曲するもの、比較的鋭く「く」の字状に屈曲するもの、やや屈曲度のあまいもの等がある。凹線文が施されているものは、明瞭な凹線文はあまりなく、沈線化しているものが大部分である。

外面の最終調整は基本的にハケ調整などであるが叩き目が残存するものが目立つ。中にはハケ調



Tab. 5 器種組成比率

整が施されてないものも僅かではあるが存在する。内面ではヘラケズリの範囲が頸部直下まで認められるが、ヘラケズリ調整後ナデ調整などが施されるものが多い。

鉢は土器全体の13%である。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプと体部が直線的にのび、脚部を持つタイプである。この他、図化していないが口縁部が外反する大型の鉢も出土している。

高杯は土器全体の8%であり、杯部の形態から二種類に大別できる。やや深い杯部に口縁部が大きく外反するタイプと直立気味に立ち上がる口縁部を有するタイプである。脚部は大きくひろがる。端部は平坦に仕上げるためのナデ調整により若干粘土が突出するのみで、拡張は認められず凹線文も施されない。分割成形技法である。

蓋は土器全体の2%であり、1点のみの出土である。中実の把手部分から大きく水平近くまでひろがる傘部をもつ。

器台は土器全体の2%であり、1点のみの出土である。口縁部を上下に拡張し、竹管文を施す。

以上のような特徴から勇前遺跡出土資料は後期前葉に位置付けられる。

また、搬入土器が多く出土している。讃岐地域からのものであり、上天神遺跡出土資料に併行させることができる<sup>5</sup>。器種組成は壺<sup>6</sup>・甕・高杯である。讃岐地域からの搬入が増加するのは後期前葉であり、出原氏はこのような土器群を後期後半以降の「下川津B類土器」に通ずる歴史性を有することから「プレB類土器」と称し、「古墳時代社会への胎動を告げる一つの現象」と位置付けている<sup>7</sup>。

次に、県東部で比較的様相が判明している清水寺岡遺跡をも含め検討してみる。清水寺岡遺跡は勇前遺跡から約2km下流にあり、安芸川左岸の段丘上に位置しており、両遺跡は同様の立地である。1985年度の発掘調査により、住居跡などが検出されている<sup>8</sup>。

壺は広口壺、直口壺、細頸壺である。広口壺は短い頸から口縁部がひらくもの、直立気味の頸部をもち口縁部が大きく外反するもの、ラッパ状に口縁部が大きくひらくものである。

甕は凹線文系のものと「南四国型甕」である。凹線文系のものでは、口縁部を比較的シャープに屈曲させる。口唇部を拡張し、凹線文を施す。「南四国型甕」は口縁部外面に非常に薄い粘土帯を貼付する。上胴部は櫛描文、浮文などで飾る。

鉢は小型のものが1点図化されているのみである。

高杯では、杯端部を凹面状に仕上げ、外方に摘み出す。脚端部は拡張されるが、明瞭な凹線文は認められない。脚部内面はヘラケズリ調整を施す。円盤充填技法である。

以上のような特徴から、勇前遺跡の前段階に属する土器群と考えられる。両者を比較すると、貼付口縁の消滅、「南四国型甕」の消滅、凹線文の退化等の変化を認めることができる。

最後に高知平野下ノ坪遺跡出土土器と若干比較してみる。勇前遺跡では後期前葉を象徴する長頸壺が欠落している。この点については第章で述べたように削平が激しく、本来は長頸壺が存在している可能性がある。高杯は下ノ坪遺跡で明らかとなったように、勇前遺跡においても分割成形技法が認められた。

## 2. 打製石鏸について

県下では供伴遺物等から弥生時代中期後半から後期前半のものと推定される打製石鏸は100点弱を数え、このうち約3割が有茎式のものである。有茎式の打製石鏸が出土しているのは、田村遺跡、本村遺跡、清水寺岡遺跡、勇前遺跡のみである。有茎式の占める割合は清水寺岡遺跡<sup>9</sup>では58%<sup>10</sup>、勇前遺跡では50%、本村遺跡<sup>11</sup>では54%、田村遺跡<sup>12</sup>では3%であり、下ノ坪遺跡<sup>13</sup>、福井遺跡<sup>14</sup>、バーガ森北斜面遺跡<sup>15</sup>、北高田遺跡<sup>16</sup>、具同中山遺跡群<sup>17</sup>等ではそれぞれ0%である。清水寺岡遺跡、勇前遺跡、本村遺跡では有茎式石鏸が半数以上を占め、他の遺跡とは様相が異なる。また、本村遺跡と田村遺跡群とは同じ物部川流域にありながら後者では僅か3%にすぎないことには注意する必要がある。

以上のように、有茎式の打製石鏸は時期的には中期末～後期前半に集中し、地域的には野市町から安芸市にかけてのごく限られた範囲に分布することが確認できる。

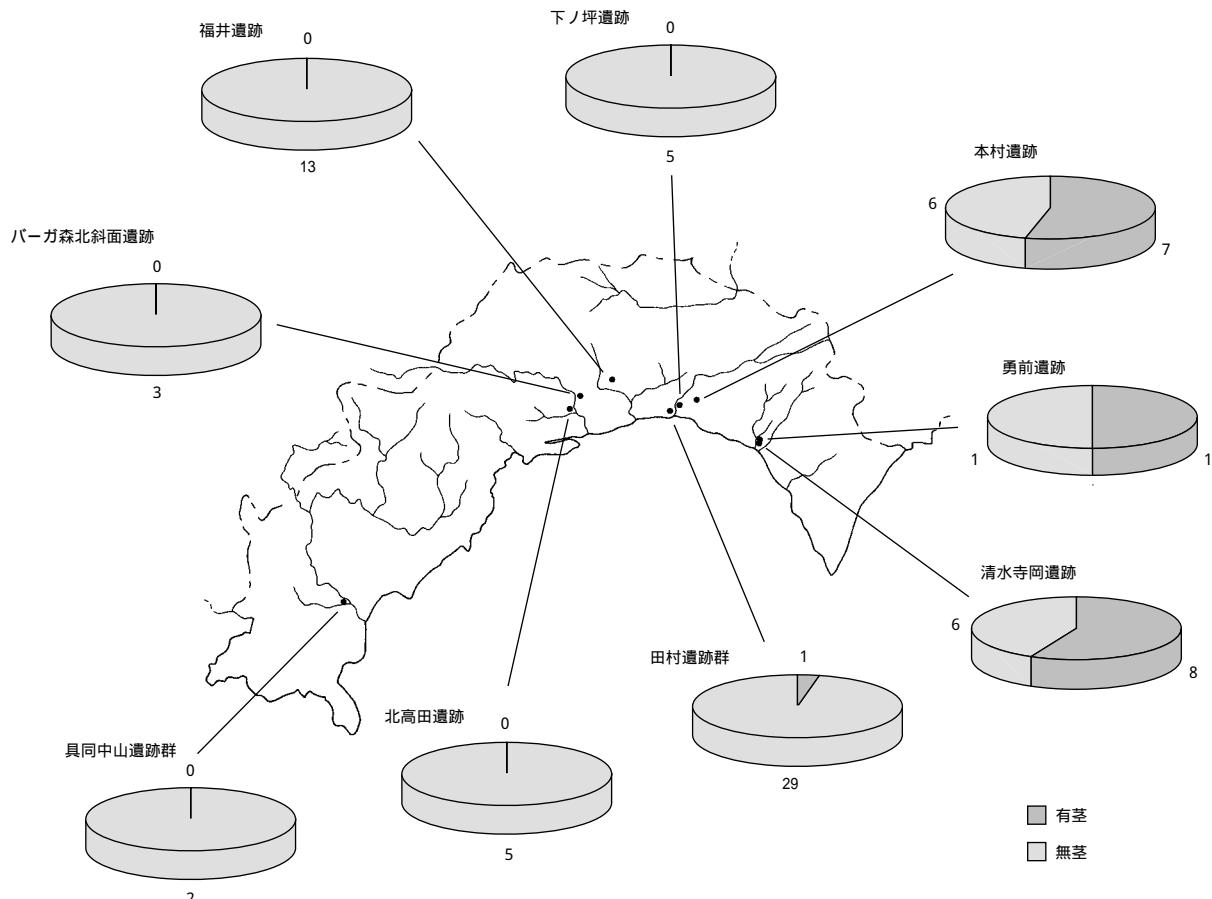


Fig.21 有茎式・無茎式比率分布図

## 註

- 1 器種が判別できる口縁部片をカウントした。器種を判別できない口縁部片が少量存在したが、これらについてはカウントの対象から除外した。
- 2 坂本憲昭 1993 『本村遺跡』高知県野市町教育委員会
- 3 出原恵三 1997 「第 章考察 1. 下ノ坪遺跡出土の弥生後期土器について」『下ノ坪遺跡』 高知県野市町教育委員会
- 4 前掲書註 3
- 5 大久保徹也・森 格也 1995 『上天神遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国建設局
- 6 図化できなかったが包含層から体部片が出土している。
- 7 出原恵三 1998「第 章考察 1. 下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡』 高知県野市町教育委員会
- 8 山本哲也 1990『清水寺岡遺跡』 安芸市教育委員会
- 9 前掲書註 8
- 10 清水寺岡遺跡は基部が不明なものも含まれているため、さらに割合が増加する可能性が高い。
- 11 前掲書註 2
- 12 廣田佳久 1986 「Loc. 34A」『田村遺跡群』 第4分冊 高知県教育委員会  
岡本健児・出原恵三 1986 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書』 高知県教育委員会
- 13 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし 1997 『下ノ坪遺跡』 高知県野市町教育委員会  
小松大洋 1998 『下ノ坪遺跡』 高知県野市町教育委員会
- 14 江戸秀輝・坂本憲昭 1999 『福井遺跡』 (財)高知県埋蔵文化財センター
- 15 伊藤 強 2001 『バーガ森北斜面遺跡』 高知県伊野町教育委員会
- 16 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳 2000 『北高田遺跡』 (財)高知県埋蔵文化財センター
- 17 松田直則・浜田恵子・池澤俊幸・筒井三菜 2001 『具同中山遺跡群』 (財)高知県埋蔵文化財センター

## 参考文献

- 小林行雄・佐原 真 1964 『紫雲出遺跡』 詫間町文化財保護委員会

# 遺物觀察表

Tab. 6 出土土器観察表 1

Fig. No.	図版 No.	器種	器形	出土地点	特 徴(調整等)	胎 土	色 調		法量(cm)			備 考
							内面	外面	口径	器高	底径	
10	1	弥生 土器	壺	ST1	口唇部に四条の凹線文。内 外面、摩耗のため調整不明。	直径5mm大以 下の砂粒を多 く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色(23.6)	-	-	-	
10	2	弥生 土器	甕	ST1 - P1	断面三角形の粘土帯を貼付し、 口唇部を拡張。内面、ナデ・ ヘラケズリ。外面、ナデ。	直径2mm大以 下の砂粒を多 く含む。	灰黄色	灰黄色(17.3)	-	-	-	
10	3	弥生 土器	甕	ST1	内面、ナデ・ヘラケズリ。 外面、叩き後、ナデ。	直径4mm大以 下の砂粒を多 く含む。	灰白色	にぶい 橙色	18.1	-	-	外面に煤付着。
10	4	弥生 土器	甕	ST1 - P1	口唇部に二から三条の凹線文。 内面、ナデ。指頭圧痕 有り。外面、ナデ。	角閃石・火山 ガラスを多く 含む。	赤褐色	赤褐色(15.0)	-	-	-	讃岐地域から の搬入土器。
10	5	弥生 土器	鉢	ST1 - P1	口唇部に二条の凹線文有り。 内面、ナデ。外面、叩き後、 ナデ。	直径4mm大以 下の砂粒を多 く含む。	灰黄色	にぶい 黄橙色(33.1)	-	-	-	
10	6	弥生 土器	甕	ST1 - P1	口唇部に二から三条の凹線文。 内面、ナデ。外面、ナ デ・ミガキ。	角閃石・火山 ガラスを多く 含む。	にぶい 赤褐色	明赤褐色(11.8)	-	-	-	讃岐地域から の搬入土器。
10	7	弥生 土器	甕	ST1 - P1	内面、ナデ・ヘラケズリ。 指頭圧痕有り。外面、ナデ・ ハケ。	角閃石・火山 ガラスを多く 含む。	明赤褐色	明赤褐色	-	-	-	讃岐地域から の搬入土器。 外面に煤付着。
10	8	弥生 土器	高杯	ST1	内面、ミガキ・ナデ。外面、 ミガキ・ハケ。	直径4mm大以 下の砂粒を多 く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	25.0	-	17.4	分割成形。
12	9	弥生 土器	甕	ST2	口唇部に二条の凹線文。内 面、ナデ・ヘラケズリ。外 面、叩き後、ナデ。	直径5mm大以 下の砂粒を多 く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色(16.4)	-	-	-	外面に煤付着。
12	10	弥生 土器	底部	ST2 - P1	内面は摩耗のため調整不明。 外面、叩き後、ナデ。	直径6mm大以 下の砂粒を多 く含む。	橙色	橙色	-	-	( 8.3 )	
12	11	弥生 土器	体部	ST2 - P2	外面、ハケ。	直径3mm大以 下の砂粒を多 く含む。	橙色	橙色	-	-	-	絵画土器?。
12	12	弥生 土器	鉢	ST2	内面、ハケ。外面、摩耗の ため調整不明。	直径3mm大以 下の砂粒を多 く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	-	-	3.0	
12	13	弥生 土器	底部	ST2	内面、ナデ・ヘラケズリ。 外面、叩き後、ナデ。	直径6mm大以 下の砂粒を多 く含む。	暗灰黄色	にぶい 黄色	-	-	( 4.2 )	
12	14	弥生 土器	鉢	ST2 - P4	内面、最終調整は縦方向の ナデ。外面、叩き後、ナデ。	直径3mm大以 下の砂粒を多 く含む。	灰黄褐色	にぶい 黄橙色(12.9)	7.0	3.4		
15	15	弥生 土器	壺	ST3 - 中央ピット	口縁部に二条の凹線文。内 外面、摩耗のため調整不明。	直径4mm大以 下の砂粒を多 く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色(14.0)	-	-		
15	16	弥生 土器	壺	ST3	内外面、摩耗。内外面、ナ デ?。	直径5mm大以 下の砂粒を多 く含む。	浅黄橙色	灰白色	-	-	-	
15	17	弥生 土器	壺	ST3	内面、ナデ。指頭圧痕が顯 著。粘土接合痕跡有り。外 面、ミガキ。	直径3mm大以 下の砂粒を少 量含む。	明黃褐色	黃褐色	-	-	-	
15	18	弥生 土器	壺	ST3	口唇部を上下に拡張。二条 の凹線文有り。内外面、摩 耗のため調整不明。	直径4mm大以 下の砂粒を多 く含む。	灰白色	灰白色(15.6)	-	-		

( ) 内は復原値

Tab. 7 出土土器観察表2

Fig. No.	図版 No.	器種	器形	出土地点	特 徴(調整等)	胎 土	色 調		法量(cm)			備 考
							内面	外 面	口径	器高	底径	
15	19	弥生土器	壺	ST3	内外面、摩耗。内外面、ナデ?。	直径5mm以下の砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	橙色	(17.8)	-	-	
15	20	弥生土器	壺	ST3	口唇部を上下に拡張。内外面、摩耗のため調整不明。	直径5mm以下の砂粒を多く含む。	灰色	浅黄橙色(13.2)	-	-	-	
15	21	弥生土器	甕	ST3	口唇部を上下に拡張。二条の凹線文。内面、ナデ。指頭圧痕有り。外面、ナデ。	角閃石・火山ガラスを多く含む。	赤褐色	赤褐色(14.0)	-	-	-	讃岐地域からの搬入土器。
15	22	弥生土器	甕	ST3	口唇部を下方に拡張。頸部が直立。内面、ナデ・ヘラケズリ。外面、叩き後、ナデ。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	橙色	(17.0)	-	-	外面に煤付着。
15	23	弥生土器	底部	ST3	上げ底。内面、ヘラケズリ。外面、叩き後、ナデ。	直径6mm以下砂粒を多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	-	-	(6.8)	
15	24	弥生土器	底部	ST3 - P10	内外面、やや摩耗。内面、ナデ。外面、叩き後、ナデ。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	灰白色	にぶい 黄橙色	-	-	(6.5)	被熱変色。
15	25	弥生土器	底部	ST3	内外面、ナデ。外面底部附近に指頭圧痕有り。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	黄灰色	灰黄褐色	-	-	4.1	
15	26	弥生土器	器台	ST3	口唇部を下方に拡張。五条の凹線及び沈線文。竹管文。内面、ナデ。外面、ハケ。	直径2mm以下砂粒を多く含む。	黄灰色	にぶい 黄橙色	-	-	-	
15	27	弥生土器	蓋	ST3	内外面、摩耗のため調整不明。	直径7mm以下砂粒を多く含む。	灰色	にぶい 黄橙色	(11.6)	4.1	-	
15	28	弥生土器	把手	ST3 - P10	内外面、ナデ。	直径2mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	-	-	-	
15	29	弥生土器	鉢	ST3 - P6	内面、ハケ。外面、ハケ・ナデ。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	褐灰色	(12.4)	5.6	(4.0)	
15	30	弥生土器	鉢	ST3	脚が付く。内外面、摩耗のため調整不明。	直径6mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	(9.8)	6.6	(4.4)	
18	40	弥生土器	壺	ST4	口縁部に二条の凹線文。内面、ナデ・ハケ?。指頭圧痕有り。外面、ハケ。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	(14.0)	-	-	
18	41	弥生土器	甕	ST4	断面三角形の粘土帯を貼付し、口唇部を拡張。内外面、摩耗のため調整不明。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色(20.0)	-	-	-	外面に煤付着。
18	42	弥生土器	甕	ST4	口唇部を下方に若干拡張。二条の凹線文。内面、ヘラケズリ・ナデ・ハケ?。絞り目有り。外面、ハケ。	直径5mm以下砂粒を多く含む。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	(15.6)	-	-	外面に煤付着。
18	43	弥生土器	甕	ST4	口唇部を上方に拡張。二条の凹線文。内面、ヘラケズリ・ナデ。外面、叩き後、ナデ。	直径7mm以下砂粒を多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色(20.0)	-	-	-	
18	44	弥生土器	甕	ST4	口唇部を上方に拡張。二条の凹線文。内面、ヘラケズリ・ナデ。外面、叩き後、ナデ。	直径4mm以下砂粒を多く含む。	浅黄橙色	にぶい 橙色	(15.0)	-	-	外面に煤付着。

( ) 内は復原値

Tab. 8 出土土器観察表3

Fig. No.	図版 No.	器種	器形	出土地点	特 徵(調整等)	胎 土	色 調		法量(cm)			備 考
							内面	外面	口径	器高	底径	
18	45	弥生 土器	高杯	ST4	内外面、摩耗のため調整不明。	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	灰白色	浅黄橙色	(23.4)	-	-	
18	46	弥生 土器	高杯	ST4	外面に五条の凹線文。内面、ハケ・ナデ。外面、ナデ。	直径3mm大以下の砂粒を多く含む。	浅黄橙色	[にぶい] 黄橙色	(27.0)	-	-	
18	47	弥生 土器	高杯	ST4	内外面、摩耗のため調整不明。	角閃石・火山ガラスを多く含む。	褐色	褐色	-	-	-	讃岐地域からの搬入土器。
18	48	弥生 土器	高杯	ST4	内外面、ナデ。連続成形。	直径6mm大以下の砂粒を多く含む。	[にぶい] 橙色	橙色	-	-	11.8	
18	49	弥生 土器	ミニチュア	ST4	内外面、ナデ。	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	(6.2)	4.2	2.1	
20	50	弥生 土器	壺	TR1	断面三角形の粘土帯を貼付し、口唇部を拡張。内外面、摩耗。ナデ?。	直径2mm大以下の砂粒を多く含む。	オリーブ 黒色	[にぶい] 黄橙色	(18.3)	-	-	

( ) 内は復原値

Tab. 9 出土石器・ガラス小玉観察表

Fig. No.	図版 No.	器 形	出土地点	特 徵	石 材	法 量(cm·g)				備 考
						全長	全幅	全厚	重量	
16	31	石包丁	ST3	磨製・直線刃。両刃。一穴。	千枚岩	9.5	4.0	0.5	34.9	ほぼ完形。
16	32	石包丁	ST3	磨製・直線刃。両刃。	千枚岩	-	-	0.4	3.8	端部片。
16	33	石包丁	ST3	磨製。	千枚岩	-	-	-	1.8	
16	34	石包丁	ST3	未製品。	千枚岩	10.2	5.6	0.6	96.5	
16	35	石鎌	ST3	打製。有茎式。	サヌカイト	-	3.3	0.6	14.3	
16	36	石鎌	ST3	打製。有茎式。	サヌカイト	-	2.1	0.3	5.3	
16	37	砥石	ST3	3面に使用痕有り。	砂岩	-	-	-	106.0	
16	38	不明	ST3	球形を呈する。被熱?	-	-	-	-	247.4	
16	39	ガラス小玉	ST3	多角形を呈する。コバルトブルー。	-	0.6	0.6	-	0.1	孔径0.2cm。

# 写真図版





調査区遠景



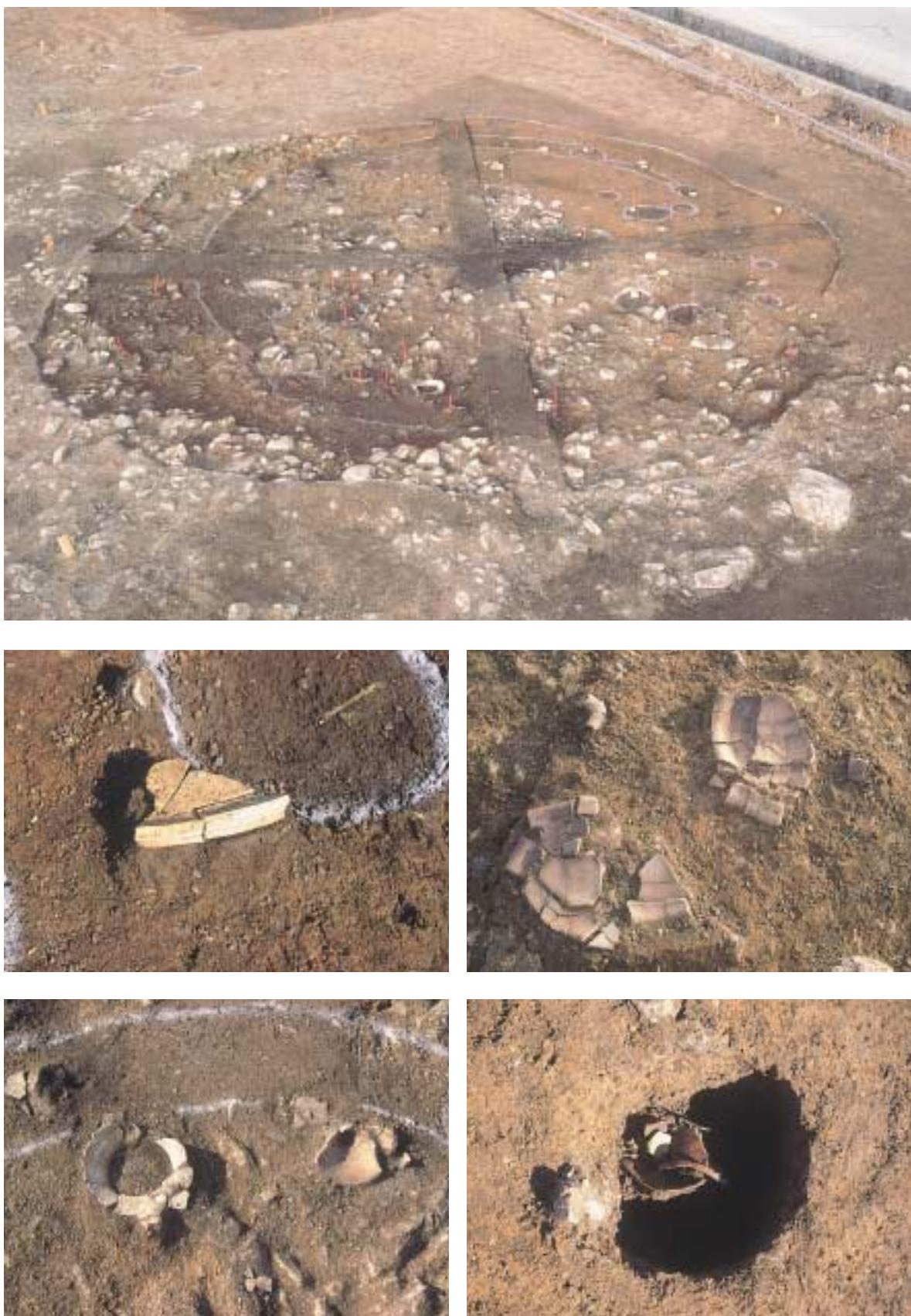
調査区近景



ST 1 検出状況



ST 1 完掘状況



ST 1 遺物出土狀況



ST 2 検出状況



ST 2 完掘状況



ST 3 檢出状況



ST 3 完掘状況



ST 3 遺物出土状况



ST 4 完掘状况



完掘状况全景



22



3



27



30



14

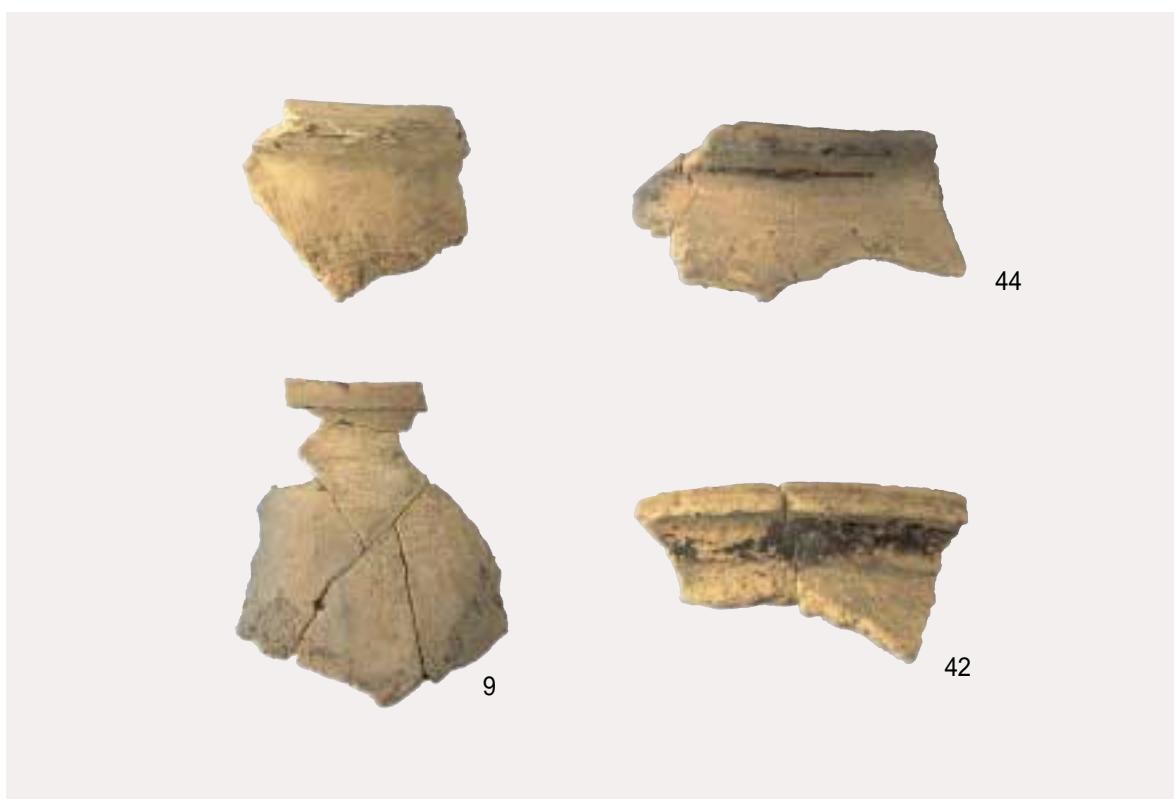
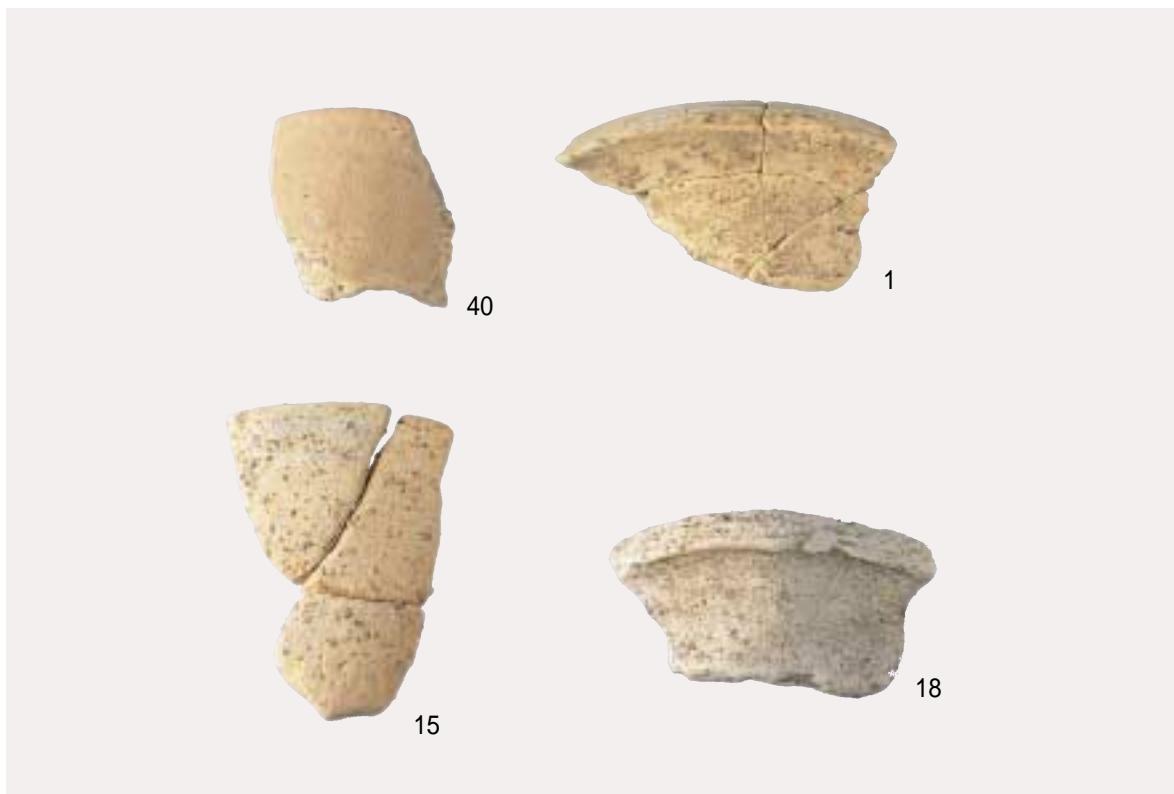


8

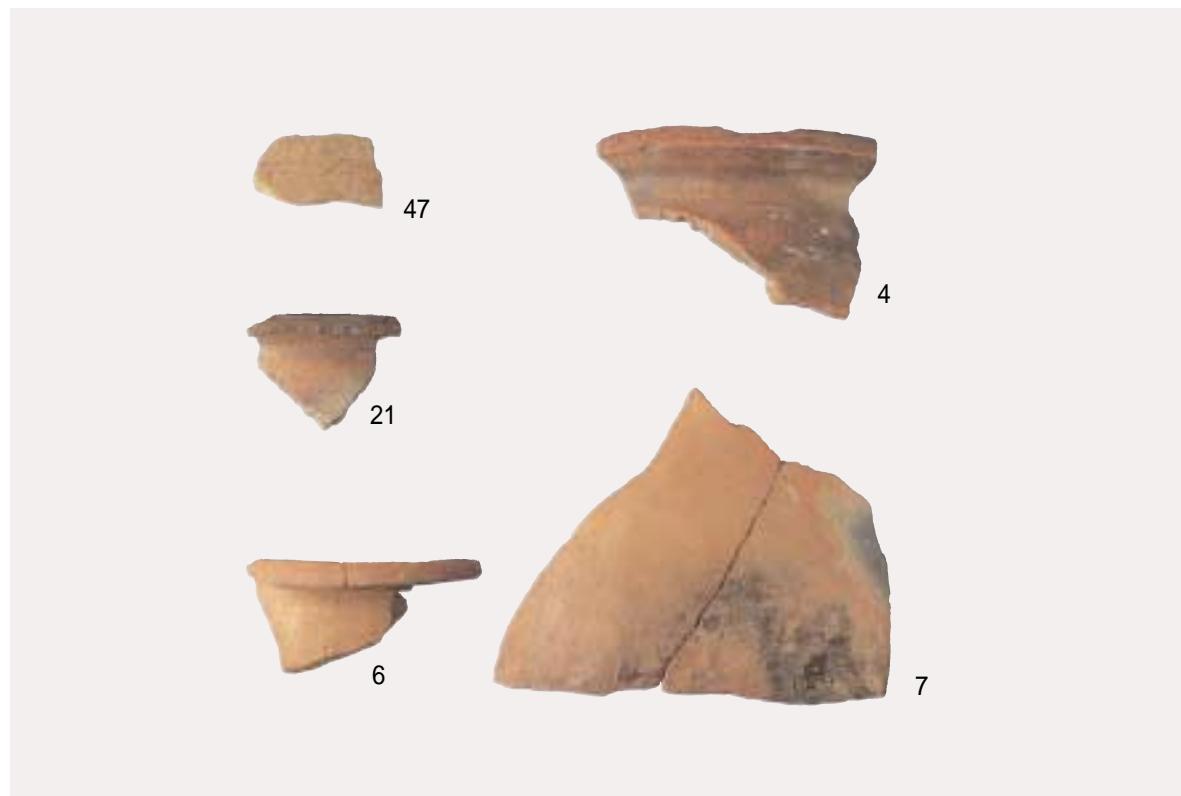


48

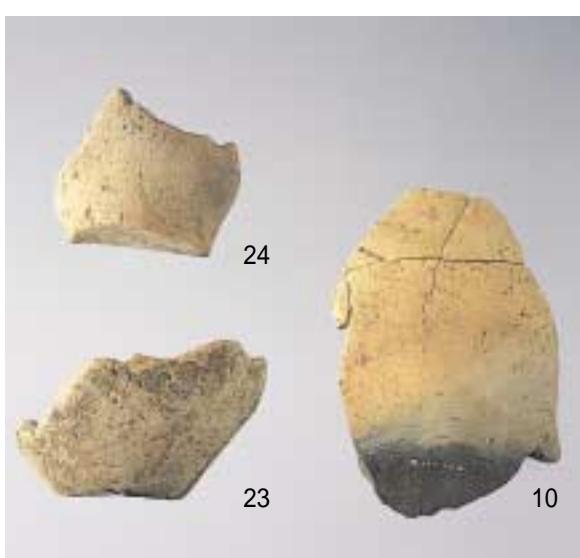
出土遺物



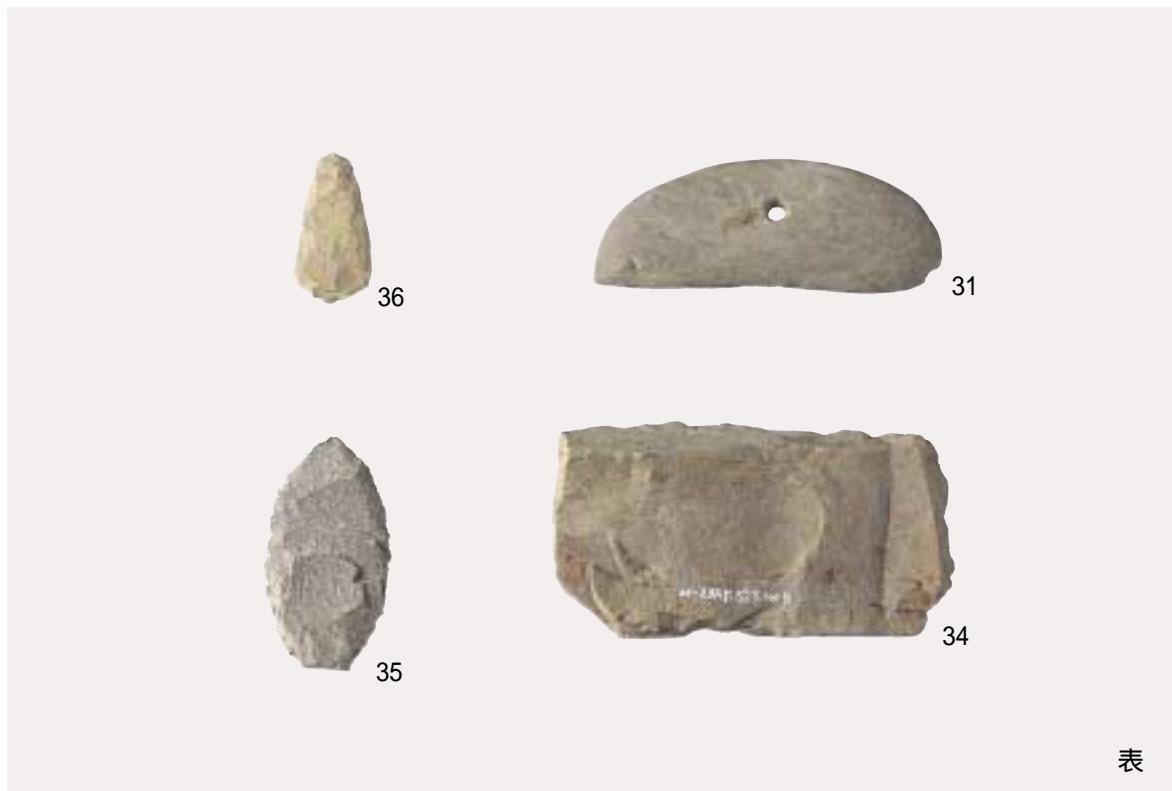
出土遺物



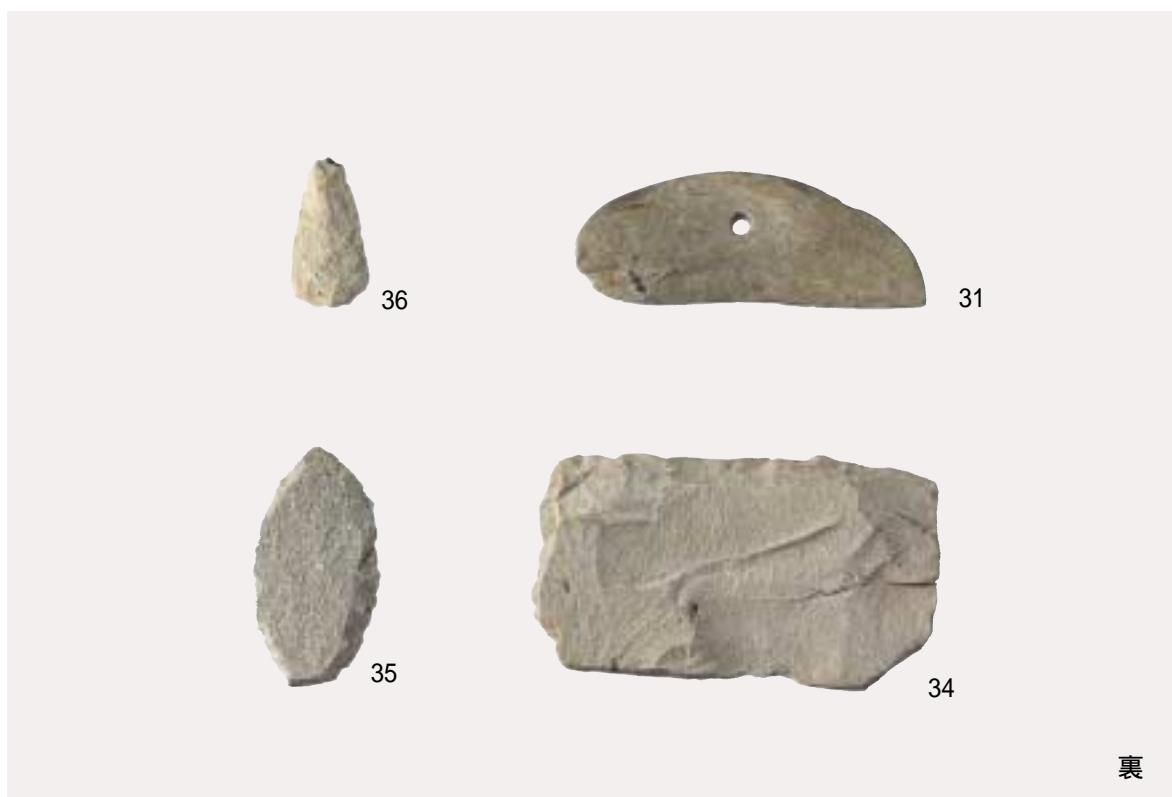
出土遺物



出土遺物



表



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ゆうぜんいせき							
書 名	勇前遺跡							
副 書 名	県道宮ノ上川北線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第77集							
編 著 者 名	森田尚宏・久家隆芳							
編 集 機 關	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発 行 年 月 日	2002年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	33° 32 59	133° 54 42	平成13年10月10日～ 平成13年10月12日	100m <sup>2</sup>	県道宮ノ 上川北線 緊急地方 道路整備 事業
ゆうぜんいせき 勇前遺跡	こうちけん 高知県 あきし 安芸市 うちはらの 内原野	39203	030023			平成14年2月5日～ 平成14年2月22日	599m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
勇前遺跡	集落	弥生 時代	竪穴住居跡	弥生土器・磨製 石包丁・打製石 鎌・ガラス小玉		讃岐地域からの搬入土 器が出土。		
	集落	詳細な 時期不 明	堀立柱建物跡					

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77集

## **勇前遺跡**

2002年9月30日

編集 高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原1437-1

電話(088)864-0671

印刷 (有)西村謄写堂